みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Land Use System and Social Relations in an Irrigated Agricultural Area along the Nile : A Case from a Village of the Northern Sudan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004271

ナイル川流域における土地利用と灌漑農業をめぐる社会的諸関係

——北スーダン・ナイル県の一村落の事例報告——

大　塚　和　夫*

Land Use System and Social Relations in an Irrigated Agricultural Area along the Nile

——A Case from a Village of the Northern Sudan——

Kazuo OHTSUKA

This paper aims to describe ethnogaraphically a system of land use and some aspects of the social relations found in an irrigated agricultural area along the Nile river. Most of the data I present here was taken during my field research in 1986–87 and 1989 in a village belonging to the Nile Province of the Republic of the Sudan.

The land around the village is divided into four categories according to the ways of water supply and the forms of land ownership. The first category, *jarif*, indicates the long strip of the land along the Nile. Since this area is regularly flooded and completely covered with the Nile water for several months in the rainy season, an owner of the land can cultivate it without special irrigation. Next to the *jarif* land, fertile fields extend widely. That area is called *jazīra* and has been the main portion of the cultivated lands the villagers personally owned. Farmers used to exploit it by making use of the water wheel, which had been turned by cattle for irrigating from the Nile. Today pumping machines worked by a diesel engine take the place of the old apparatus and efficiently supply a large quantity of water from the Nile to the *jazīra* land.

The introduction of pumps in the irrigation system, which started in

* 国立民族学博物館第3研究部

Key Words : Sudan, riverine Arabs, pump irrigation, land use system, sharecropping arrangement

キーワード：北スーダン，ナイル沿岸アラブ，ポンプ灌漑，土地利用体系，分益小作の取り決め

the middle of the 1940's in this village, changed drastically the activities of agriculturists in this region, because it transformed a vast land beside the *jazīra* into cultivable fields. The area called *karū*, which had been uncultivated due to lack of water supply and being owned by the government, was turned into a large scale farm under supervision of the village leader, then Mr. HA, who registered at a government office to obtain a right to use the land as a field. He also bought two pumps with the financial help of the Mahdist office in the capital and set them up at an appropriate site of the Nile bank. This project, which has been called the HA Pumping Scheme, started to work in 1951 and is nowadays managed by HA's son, Mr. AH.

Besides the Scheme, some of the well-off families in the village, who separately purchased a pumping machine and gained a right to use a portion of the government-owned land, managed to dig a well to supply water to the field around it. The field irrigated from the well is called *matara*. We now find newly cultivated *matara* fields even in the desert area called *khalā*, far from the village as well as in some parts of the *karū* land.

Based on this system of land use, farmers make peculiar arrangements to divide the crop among the land owner (in the case of the *jazīra*) or the registrant (in the case of the *karū*), the man providing water to the field (that is, the owner of a pump), and the cultivator. In case of the *karū* belonging to the HA Scheme, Mr. AH, who is a registrant of the land as well as an owner of the pumps, divides fifty-fifty on the harvest with a cultivator who agrees with Mr. AH about his right to cultivate the allotted portion of the *karū* land.

In the *jazīra*, where a system of the private land ownership has been established for a long time, Mr. AH, who supplies water, and a cultivator who owns the field personally share the crop after deducting necessary cultivating expenses from it. If the owner of the land cannot work his field for some reason, such as a migration to one of the oil-producing countries and if he asks a reliable person to cultivate his land, he can obtain one-eighth of the crop as a right of the land owner. This portion he would receive is called *karij*. The cultivator and Mr. AH, a provider of water, share the rest of the crop.

I also discuss variations of arrangements, as a kind of sharecropping system; cooperative activities among villagers, called *nafīr*; and a significant role of agricultural workers recruited from the outside of the village.

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．マフムーダブの概要
　1．村の沿革
　2．今日の村落機構
　3．「親族」集団
Ⅲ．灌漑体系と土地利用の諸形態
　1．農業用水源としてのナイル
　2．灌漑方式
　3．土地利用の諸形態
　4．畑作りと給水
　5．農作物
Ⅳ．灌漑農耕をめぐる社会的諸関係
　1．農作業にかかわる人々の関係
　2．収穫物分配の取り決め
　3．ポンプ設置をめぐる協力と対立
　4．共同作業と前借り関係
　5．農業組合
　6．村外からの農業労働者
Ⅴ．総括と今後の課題

Ⅰ．はじめに

筆者は，1986年度から89年度にかけて，文部省の科学研究補助金を受けて，北部スーダンの農村における社会組織ならびに伝統的知識体系などの調査をする機会に恵まれた。小稿は，その現地調査にもとづき，同国ナイル県のアラブ人ムスリム（アラビア語を日常語とするイスラーム教徒）村落に見られる灌漑システム，それと密接に関連した土地利用の諸形態，さらに農作業の実態とその過程で展開される村内および村外にまたがる社会的諸関係のあり方の実態報告である[1]。

最初に調査地の位置と調査の状況について簡単にふれておきたい。

スーダンの首都ハルトゥームで合流する白ナイルと青ナイルは，地中海に向かって

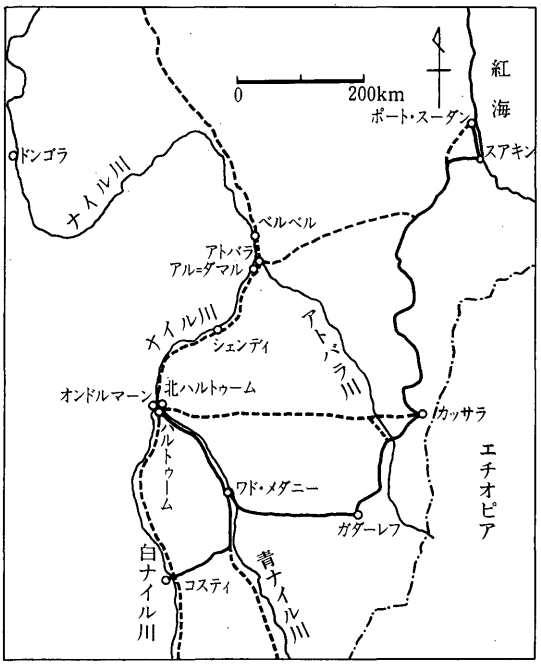
1）現地調査は，昭和61年度，63年度および64年度の文部省科学研究補助金（海外学術調査）を受けたプロジェクトによって可能になったものである。61年度のテーマは「乾燥アフリカにおける農・牧社会の比較研究――北東アフリカを中心に」，63年度，64年度のそれは「北東アフリカにおける生業システムの比較研究――民俗モデルの構築とその適用の可能性」であり，ともに本館の福井勝義助教授を研究代表者とするものである。61，64の両年度は小稿で論じるナイル県，63年度は北東部のカッサラ県で現地調査を行なった。スーダンでは，Khartoum University の Institute of African and Asian Studies の客員研究者として調査活動を行なった。同研究所の Dr. Sayyid Hurreiz（当時所長）ならびに Dr. Abdallahi Ibrahim の両教授には，調査実施の上でさまざま有益な助言をいただいた。61，64年度の調査地近くのダマル市では，Mr. Salah al-Din Hammad にお世話になった。さらに，ここではマフムーダブという仮名で登場する調査地では，Shaikh ᶜAwad, Masᶜūd, Khālid, Ibrāhīm, ᶜAbd al-Mājid, Al-Sayyid，その他の多くの人々から暖かいもてなしと協力をいただいた。また，調査グループ，特にスーダン班の福井助教授，堀信行助教授（広島大学），小川了助教授（民博）からも，現地ならびに帰国後のさまざまな機会にご助力，ご助言とお気遣いをいただいた。また，同時期にスーダンで調査をしていた栗田禎子氏（現都立大）からも，有益な情報をいただいた。

さらに，本稿作成の過程では，本誌編集委員会の友枝啓泰教授，片倉もとこ教授，そして福井勝義助教授から，貴重なご批判・ご教示をうけた。

特に記して，これらの方々に謝意を表するものである。

北上する。同川に沿いつつ北へ向かうと，首都から300キロほど離れた地点にスーダン鉄道の拠点アトバラ（ᶜAṭbara）市（人口約9万，1986年推定）がある。ここを分岐点として，鉄道は北上してエジプト国境に向かう路線と，東に向かい紅海に達する路線とに分かれる。同市から逆に首都に向かい南下し10キロほどのところに17～19世紀にかけて最盛期を迎えたスーフィー教団マジュズービーヤ（Majdhūbīya）の町，アル＝ダーマル（Al-Dāmar）市（人口約3万，86年推定。以下ダマルと略記）がある。調査地マフムーダブ（Maḥmūdab，仮名）は，ダマルからナイルに沿ってさらに南下し，7キロほど進んだナイル東岸に位置している（図1－1，1－2の地図参照）。

1989年現在，ダマル市にあるダマル郡役所（majlis rīf al-Dāmar）に登録されている同村の人口は，2365人である[2]。ナイルからの灌漑農耕に依存するところの多い村落であるが，農業以外の職業に就いている村人もかなりおり，また「本職」のかたわら畑を耕作するパートタイム農民も多い。農業以外の仕事としては，近くのダマル市



——— 川
——— 舗装道路
------ 未舗装もしくは舗装予定の幹線道路

図1-1　北部スーダン地図

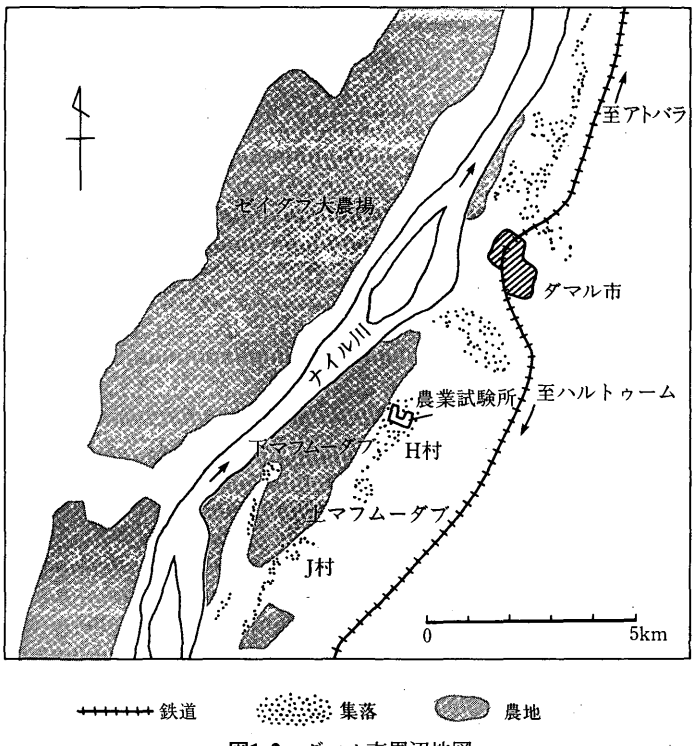


図1-2　ダマル市周辺地図

にある役所・企業などでの雇用，小型トラックやタクシーの運転，北隣りの H 村にある農業試験所勤務などがある。

すなわち，マフムーダブは「孤立した閉鎖的な農村共同体」ではない。後で述べるように，この村の農業活動は，ダマル市の市場はもとより，スーダン全体の政治・経済状況と密接にかかわっている。日常生活においても，ダマル市とは密接なコミュニケーションが保たれており，小型のピックアップや大型トラック改造バスなどを利用

2)　これは89年11月28日に郡役所の係官から聞いた数字である。しかし，私は86年12月 1 日にハルトゥームの人口調査センター（Maktab ta'dād al-sukkān）で，83年 2 月に実施された国勢調査の中間集計として，上マフムーダブは433名，下マフムーダブは398名，合計831名が両マフムーダブの住民の総数であると教えられた。2 つの調査には 6 年半ほどの開きがあるとはいえ，これらの数字の差（約 3 倍弱）は常識的な人口増加の範囲を越えていると思われる。調査の誤差もあると思えるが，その他何らかの数字の操作が含まれている可能性もある。89年の数字は，砂糖，食用油などの生活必需品の配給制度にも絡んでおり，そのため出稼ぎや勉学などで一時的に村を離れている者もそのなかに含まれている可能性がある。したがって，ひとつの屋敷地（後述）あたり10名ほどが住んでいると考え，おおよそ千数百ほどが実際に村に暮らしている人の数ではないかと私は推定している。ただし，戸別訪問を行ない，正確な人口調査を実施したわけではない。なお，89年末においても，83年の国勢調査の最終報告書は公的な形では刊行されていなかった。

して，頻繁に行き来がある。特に同市で週市が開かれる土曜日の午前中などは，少なくとも男性は，村よりも市で出会う確率が高いといえるほどである。さらに，男・女別の中学や高校も同市にあり，寄宿舎に入っている者も多いが，女子中学生などは毎日村から通学している。さらに，最大の娯楽であるサッカー見物のため，同市にあるスタジアムに出かける村人も多い。

次に，調査の実施された状況を記しておく。筆者が同村に滞在したのは，1986年10月から87年1月にかけて，および1989年10月から12月にかけての時期である。途中ハルトゥームとの連絡などで留守にした期間を除くと合計3か月半ほどである[3]。同村の有力者 AH 氏[4] の屋敷地（nimra）内のゲストルーム（muḍīfa）に寝泊りし，調査を実施した。使用言語は，アラビア語スーダン方言である。

小稿は実態調査報告であり，他地域との比較ならびに理論的考察は最小限にとどめてある。その構成は次のようになっている。最初に，調査村マフムーダブの沿革ならびに村落機構の概要を説明する。その際，小稿がこれから数編の刊行が予定されている筆者のマフムーダブ調査報告の最初のものであるところから，小稿のテーマ（灌漑農耕とそれをめぐる社会的諸関係）そのものとは直接関連しなくとも，この村の概要と村民生活の重要な諸側面とを少し詳しく紹介する（Ⅱ章）。つづいて，小稿のテーマと直接関係するナイル川および掘り抜き井戸を水源とする灌漑のシステムを，同村の土地利用の諸形態と絡みあわせて説明する。そして，農作業の実際のあり方，および主要農作物についてもふれておきたい（Ⅲ章）。その次に，そのような灌漑システムと土地利用のあり方とに規定されて成立する村人の間の社会関係のいくつかの側面を論じる。すなわち，畑からの収穫物の分配に関する取り決め，灌漑ポンプ設置をめぐる問題，村内での無償の共同作業，農民組合のあり方などに具体的に言及する。また，同村の農作業における，村外からの農業労働者の役割にもふれておきたい（Ⅳ章）。最後に小稿を総括し，今後の調査・研究の課題と展望とを述べる（Ⅴ章）。

3）記述の便宜上，以下では最初の調査を「86年調査」，2番目のそれを「89年調査」と呼ぶ。

4）小稿では，村人の名前はイニシャルで記していく。なお，アラブ地域で一般にいえるように，スーダンでも原則的に人名は，「本人の名＋父の名前＋父の父の名前」というやり方で登録されている。したがって，ここでの多くの人名は2つの大文字のアルファベットで記されるが，原則的には「本人の名前＋父の名前」のイニシャルと考えていただきたい。なお，2つの単語が結び付いてできた名前，たとえばアブー・バクルなどは，Ab とした場合もある。この村での日常生活では，本名の他に，親族名称や仇名もよく使われている。また，アラブ社会一般の名づけのやり方の概要については，D. アイケルマンの著作 [1988: 163–168] などを参照のこと。

Ⅱ．マフムーダブの概要

1．村の沿革

今日，マフムーダブと呼ばれている村は，地理的には2か所に分かれている。ナイル川の近くにある下マフムーダブ（Maḥmūdab　tiḥt）もしくは西マフムーダブ（Maḥmūdab gharb）と，そこから1キロほど東方，すなわちナイルとは逆の方向にある上マフムーダブ（Maḥmūdab fūq）もしくは東マフムーダブ（Maḥmūdab sharq）とである。

この両者のうちでは下マフムーダブの方が古い。かつてこの村は，サイヤーラ（Saiyāla）と呼ばれ，現在の下マフムーダブの位置にあった。ある老人の話しでは，かつてのイギリス＝エジプト共同統治時代（1899–1955），この村に大きなアカシア（acacia tortilis）の木（アラビア語でサイヤーラと呼ぶ）があった。そして，ある時にイギリスの行政官がこの木の陰で休息をとり，それからこの地がサイヤーラ村と呼ばれるようになったのだという。実際，私の手元にある1937年測量の地図にはこの名称が記されており，少なくとも当時はマフムーダブよりこの名前が一般的であったことを示している。ところが，1946年にこの地を襲ったナイルの大洪水（ナイルの水位の季節的変動については，Ⅲ－1参照）により，マフムーダブは大きな被害を蒙った。そこで一部の村人が，当時の村から1キロほど東，すなわち川から離れた土地に家屋を新築し，そこに家族ともども移り住むようになった。この新村を上マフムーダブと呼ぶのである。

その後，旧村から新村への村民の移動は恒常的に増え続け，今日でもその傾向は継続している。私の2回の調査の結果を比較しても，そのことは容易に指摘できる。1989年の第2回目の調査時において，上マフムーダブには86年の時点では見当たらなかった新規の屋敷地に建物が建ち人が住みだしていたり，家屋の建設途中であったりした。その35戸の新築屋敷地のうち7戸が下マフムーダブからの移転者のものであった。さらに，89年に下マフムーダブに住むSAから聞いたところでは，その時点で下マフムーダブに常住しているのは彼の家族も含めて，10家族ぐらいしかないということであった。そして，彼の場合も数か月以内に，家族全員が上の屋敷地に引っ越す予定であるといい，他に数家族が同様の計画を持っていると述べた。このような傾向が続けば，86年時点のシャイフ（村人から「オムダ＝村長」といわれることもある）

AS が予想していたように，近い将来，居住地としての下マフムーダブは消滅するかもしれない。そして，敷地の一部が農地などに転用され，村人はすべて上マフムーダブで暮らすことになるかもしれない。そうなれば，今日のような上／下もしくは東／西というマフムーダブの2つの集落の区分は，失われてしまうであろう。

2.　今日の村落機構

次に今日の村落機構を簡単に紹介するが，その際，上マフムーダブのものを中心に進めていく。その理由は，(1) 私が上マフムーダブに住み込み，そちらのほうの調査に専念したということ，(2) 先に述べたように，現在では下マフムーダブから上マフムーダブへの移動が強まっており，実質的に下マフムーダブは独立した村落としての機能を維持していないこと，(3) さらに，今日の村落機構は，これから述べるように，上マフムーダブが中心的な役割を果たしており，そこに下マフムーダブに居住している者も包摂されている形態をとっていること，などからである。

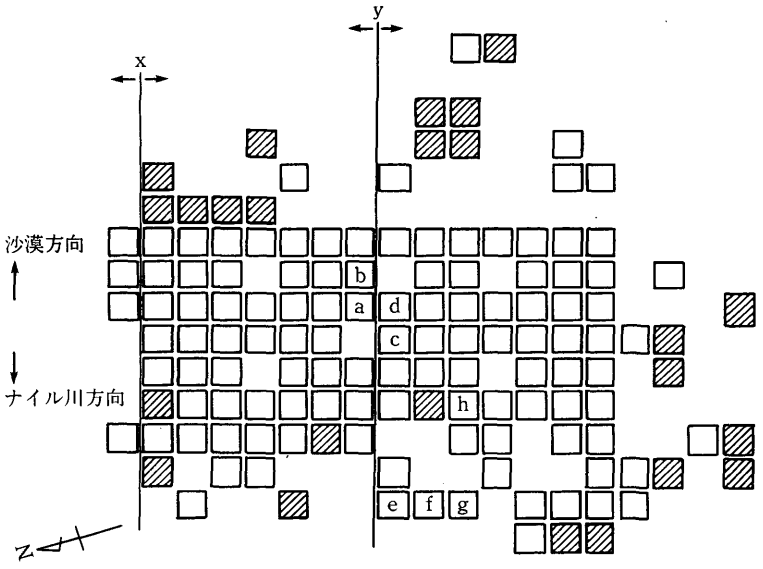
(a) 屋敷地

最初に，上マフムーダブの主要建造物および村人の屋敷地の全体的配置図を載せておく（図2）。これは正確な測量にもとづいて作成されたものではないので，あくまで概略図である。しかし，それでもこの村の空間構成のある特徴，すなわち計画された幾何学的な建造物の配置を読み取ることが可能であろう[5]。

ここで「屋敷地」と呼んでいるのは，彼らがニムラ（nimra, pl.nimar）と呼んでいるものであり，おおよそ50メートル四方の土壁で囲まれた1区画のことである。上マフムーダブが現在位置している土地は，本来的には国有地である（Ⅲ－3－cのカルー地をめぐる議論を参照）。したがって，新たなニムラを建造しようとする者は，その計画をマフムーダブ村会（後述）に申請し，そこを通してダマル市にあるダマル郡役所の許可を受けなければならない。そこから許可を得た後に，25スーダン・ポンド（以下，ポンドと略記）[6] の登録料（rusūm）を払い，それから区画の周囲に土壁を築い

5)　家屋が幾何学的に配置されている上マフムーダブと比較して，下マフムーダブの家屋は密集しており，道路も狭く曲がりくねっている。これは，あたかも中東都市論の大きなテーマである「都市計画で整備された新市街もしくは植民都市」と「迷路のようなメディナ＝旧市街」との対比を思わせるものである。これは，マフムーダブ村民の空間概念の変化とも対応しているとも思える興味深い問題であり，別稿で論じたい。なお，村人たちも上マフムーダブでは屋敷地の配置が見事に整備されていることを充分に意識している。あるインフォーマントによれば，上マフムーダブは「図面 al-rasm」という別名をもつという。

6)　スーダン・ポンド（jīnī sūdānī）の対米ドル換算率は，86年には1＄＝4.03ポンド，変動相場制に移った89年にはおおよそ1＄＝12.2ポンドであった。



a→モスク
b→男子小学校
c→女子小学校
d→診療所、保育所
e→クラブ・ハウス
f→製紛所
g→製パン所
h→調査者が住んでいたAHの屋敷地

x線の左側は、行政区分上はH村のL地区とされるが、社会通念上はマフムーダブに含まれる。
y線を境にして、左側は北村会、右側は下マフムーダブと共に南村会を構成する。
▨ 1989年調査時点で、敷地は確保されていても、まだ人が居住していない屋敷地

図2　上マフムーダブ家敷地の配置概略図

たり，家屋を建てたりし始める。

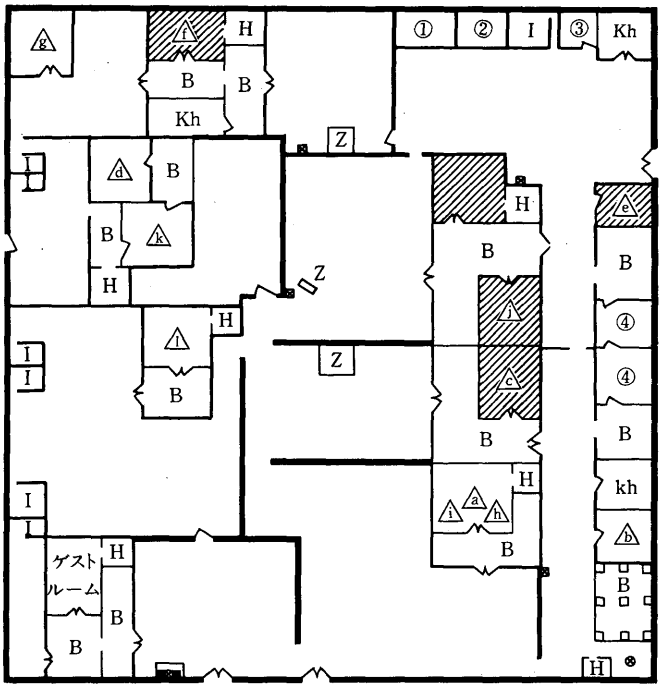
そのような手続きを経て住居として成立した屋敷地では，家族・親族・姻族関係などにある人々が共同で居住し，生活することが多い。もちろん，そのような関係のない複数の家族がひとつの屋敷地を共有することも可能である。ただし，ひとつの家屋に共住している者同士が，必ずしも共通の家計をもつとは限らない。さらに，私が住んでいた AH の所有する屋敷地のように，他の地域から来た独身の使用人，労働者などが同居する場合もある。その場合，彼らも一部屋が与えられ，表面的には露骨な生活上の不利益や待遇差別を受けたりしない。

屋敷地の内部にはいくつかの家屋があり，それらは，そこに住む人々が共同で利用している家屋・部屋・小屋と，個々の人々に一応所属している家屋もしくは部屋とに分けられる。前者の例としては，台所，ゲスト・ルーム，倉庫部屋，さらに家畜や家

禽の飼育小屋などがある。さらに，上マフムーダブには電気が供給されてはいないが，それでも一部の屋敷地には自家発電設備があり，そのためのモーター小屋などもこのグループに入るであろう。一方，後者に関してであるが，原則的に各家屋・部屋は，屋敷地の所有者（正式には「登録者」）が個人として所有している。しかし，一緒に住む兄弟やイトコなどが，自分の責任で敷地内に家屋を建てた場合，それは当然建造者の所有物になる。さらに，同居するキョウダイ，子供，イトコ，その他は，所有権こそないまでも，「自室」と呼べるものをもっている。つまり，その部屋で主にくつろぎ，ごく親しい客を迎え，睡眠をとる場である。とはいっても，アラブ人の特徴のひとつとされるホスピタリティーの慣行はここでも強く，頻繁に客が立ち寄り，夜も更けると余ったベッドに泊まり込むことなども稀ではない。つまり，ここで「自室」と記述したからといって，それを今日の欧米や日本社会におけるそれと同じようなものと見なすべきではなく，彼らの社会には近代的な「プライヴァシィー」ならびにその尊重という概念はきわめて乏しい。

また，屋敷地内部は，男性の領域と女性の領域とにかなり厳格に区別されている。すなわち，男性がお客を受け入れる場所と，女性が家事をする場所とが，明確に分かれているのである。男性の訪問者はゲスト・ルームで接待され，それよりも内部には決して入り込まない。そして，調理や洗濯といった家事は，女性たちが寝起きする家屋またはその近くの場所でのみ行なわれる。男性の訪問者がいるときに，彼女たちがゲスト・ルームに立ち入ることは禁じられており，料理を調理場から運んだりするのは，その屋敷地に暮らす少年や青年たちの仕事となる。なお，女性の訪問者は女性たちが暮らしている家屋・部屋で歓待される。

とはいっても，この原則は，あくまで「外部」からの正式な訪問者にたいして適用されるものである。その屋敷地に住んでいる者はもとより，近くに住む男性の親族・姻族などには，この原則が当てはまらない。彼らはまったく気楽に女性の空間を訪ねることができる。また，女性の側も，よそ者がいないときには，男性用のゲスト・ルームで家族や親族の男性と話したりしても咎められない。それは，長期滞在して「親族」に近い存在となったよそ者，すなわち血縁関係のない使用人や労働者，さらには人類学者の場合でも同様である。ちなみに，私が AH の屋敷地の女性の空間に入っていけるようになったのは，住み込み始めてから1か月半ほどしてからであった。このように，アラブ社会に特徴的とされる，いわゆる男女の隔離現象は，その個別的な空間に居住する特定の人々にたいして，そこを訪れる特定の人々がどのような社会的関係にあるのかによって，大きく左右されるのである。つまり，ルールはあっても，それ

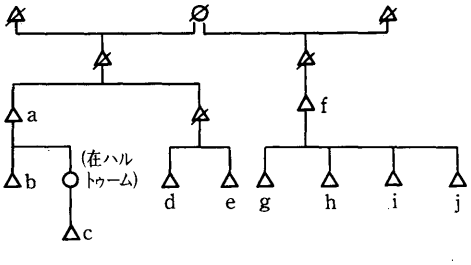


〔注〕
※これは1986年12月にメジャーを使って測量・作図したものである。その時点において、各部屋で寝起きしている男性を△記号で書き込み、彼らの系譜関係を図3-2として付けた。
また、図中▨印の部屋では、女性たちが寝起きしているとのことである。その他の記号は凡例参照。

図3-1　HA 屋敷地の概略図

が適用されるか否か，また適用される場合でもその程度は，個々の社会的脈絡によって大きく異なるのである。

屋敷地の内部区分を示すひとつの例として，筆者の暮らした AH の屋敷地の概略図，ならびに1986年時点で，原則的に誰がどの部屋で眠ることになっているかを，男性の場合のみであるが，紹介しておく（図3－1，3－2）。



＊ kとlは使用人で親族関係はない。

図3-2　HA 屋敷地の各部屋で寝起きしている男性の系譜関係

なお，男女隔離のルールは，農業労働の場面にも適用されている。マフムーダブにおいて農耕はもっぱら男性の仕事である。女性が畑に立ち入るのは，燃料となるヘンナ（後述）の枯れ枝などを取りに行くときくらいである。彼女たちは農作業そのものには従事せず，主として炊事や清掃，洗濯などの屋敷地内での家事にかかわる[7]。

（b）政治機構

行政的には，マフムーダブは，スーダン共和国の北部地域（iqlīm al-shimāl），ナイル県（mudīrīya al-nīl），中部地区局（majlis manṭiqa al-wasatī）のダマル郡役所（majlis rīf al-Dāmar）に属する一村落である。かつて，上下2つのマフムーダブは単一の村会（majlis al-qarya）を構成していたが，1989年10月からは南と北の2つの村会に分かれた。その境界線については図2を参照していただきたい。行政上二分されたとはいえ，社会的・地理的な意味において，マフムーダブの一体性には，それほどの大きな変化が現われたように思えない。なお，下マフムーダブの住民は南村会に所属している。

今日，村会の代議員は30才代の者たちを中心に，南と北でそれぞれ14名ずつ選出されている。選抜方法は選挙ではなく，南北それぞれの会に属する村人たちがそれぞれ適当な集会場に集まり，代議員にふさわしいと思える者たちを推薦して，決定するという形式をとる。この代議員選出会議には，おおよそ18才以上の青年男性であれば誰でも出席でき，ひとつの屋敷地や家族から何名出てもよいことになっている。一方，選出される代議員のなかには，20代くらいの若者の代表者がそれぞれの村会で2名含まれることになっている。また，南村会には，下マフムーダブ住民の代表が2名選ばれている。さらに，形式上は，これらの男性代議員の他に，女性の代議員が2名ずつ参加することになっているが，89年の時点では，実質的に女性の代表は選出されていなかった。また，明確に規定されていないが，代議員は後にふれる「親族」集団ごとに選出される傾向がある。

選出された代議員は月に一度，南北の村会ごとに集まり，村落生活にかかわる諸事を話し合う。さらに日常活動として，砂糖，食用油，茶などの生活物資の公定価格による配給の管理を行なったり，南北別個に開催される婦人のための「カルチャー教室」[cf. 大塚　1991a] の運営をしたりする。村にあるモスク，男女それぞれの小学校，保

7）マフムーダブの隣りのH村の農業試験所の実験農場では，マフムーダブの村民も含む女性が畑で働いている。また，村人との会話のなかで，彼らがスーダン中西部のコルドファン地方に旅行に行ったときに，女性が店を出したり，農作業をしているのをみて驚き，彼らの慣習が自分たちのそれとは異なるということを改めて知ったという話題がでたこともある。

育園(rūḍa)，クラブ・ハウス(nādī)の維持・管理，村で行なっている飲料水供給体制の整備，先にふれた屋敷地新築の申請書類の受理など，マフムーダブ全体にかかわる事項は，南北双方の代議員たちがクラブ・ハウスで合同会議を開き，審議・決定する。

このように村会は，実質的には，村の諸雑事の執行機関である。それにたいして，土地争い，盗難，喧嘩などの事件が村で生じたときに，その調停を行なう中心人物として，シャイフがいる。これは，イギリス＝エジプトの共同統治時代に成立した役職であるが，1956年の独立の後も，村内の秩序維持のレベルで機能をもつものであるとされている。現在のシャイフ AS[8] の談によれば，このような村人同士の深刻な紛争となりかねない事件が起きたときには，外部の警察権力などに届け出るまえに，内部での解決を計ろうとする傾向がある。そこで，彼の他に村の長老6～7人から構成された村民会議（majlis ahalī）が設置され，問題の解決にあたるという。

さらに，マフムーダブにおいては，村会やシャイフ以上に，実質的な政治的実力をもつ人物がいる。それは，今日のスーダン政治における指導的政党のひとつ，ウンマ党（ḥizb al-umma）のダマル地区における有力指導者のひとりである AH ——私の住んでいた屋敷地の主人——である。

そもそも，マフムーダブ村民の多くは，19世紀末のスーダン史を飾るイスラーム救世主（マフディー）運動すなわちマフディズムの支援者（アンサーリー anṣārī，と呼ばれる）であり，マフディストを主な支持母体として1945年に結成された政党，ウンマ党の熱烈な支持者である[9]。そして，今世紀の中葉に，ハルトゥームにあるマフディスト事務所との強いパイプを通して，この村に最初の大規模ポンプ灌漑プロジェクトを実現したのは，当時この地域のアンサーリーの指導者であった AH の父親，HA であった。そして，今日では AH がそのプロジェクトの総責任者となっており（Ⅲ-3-c を参照），彼は政治的・経済的に大きな実力をもっているのである。

また，彼は宗教的にも重要な人物である。村のアンサーリーの指導者として，毎週金曜日の昼の集団礼拝の説教師と導師の役を務めるのは彼であることが多く，その上，彼はダマル市に設置されているダマル郡管轄のシャリーア（イスラーム法）法廷の判事（qāḍī）のひとりでもある[10]。このように，AH は村のシャイフの役職にはついて

8) 89年においては，AS はスーダン東部のカッサラ県ガダーレフ市に出稼ぎにいっていたので，その兄弟の ArS が代理をしていた。

9) マフディズム運動に関しては，P. M. ホルトの研究 [Holt 1977] がスタンダードである。また，アンサーリーが第一次大戦期に勢力を強め，最終的にウンマ党を結成していく過程については G. ワーバーグの論文 [Warburg 1978: 21-66] などを参照。

10) ダマル郡を管轄するシャリーア法廷は，毎週，土，月，火の3日間開かれる。判事は，AH の他に2人である。私が観察した例では，警官への傷害事件の被告が25回のムチ打ちプ↗

いないが，実質的には，政治・経済・宗教いずれの側面でも村随一の実力者である。その名声はダマル，アトバラ，ベルベルなどの近くの都市にも鳴り響いており，同志などからはアミール（amīr 族長，司令官などの意味）という仇名で呼ばれている。

（c）社会施設

先に掲げた図2からも分かるように，マフムーダブには，公共施設として2つの小学校，保育所，診療所，クラブ・ハウスなどがある。さらに，モスクとそれに付随したコーラン教育施設（khalwa）も，村民の手で設立・運営されている。

マフムーダブの小学校（6年制，男女別学）は，村民の子弟のための教育施設である。最初に設立されたのは女子校のほうで，1967年のことであった。89年において，生徒数は198名，教員は8名でうち女性が6名である。一方，男子はこれまで，1952年に設立された南隣のJ村の小学校に通っていた。だが，89年にマフムーダブにも男子小が開設され，1年生から村内通学が可能になった。生徒数は50名で2人の男性教員が勤務している。なお，中学以上は村から出て，ダマル市などに行かなければならない。

保育所は1960年に創設されたものであるが，一時閉鎖状態になり，84年に再開された。89年において，3才から6才までの小学校入学前の子供，80人弱が登録している。戸外での遊びの他に，簡単な文字・算数を教えたり，初歩的なイスラーム教育（クルアーン暗唱，預言者物語を聞く）を行なったりする。保母は2人いる。そのうち一人分の給料は政府から出されているが，きわめて少額である。そこで，父兄が払う保育料（月額5ポンド）から一部補助し，2人目の給料もそこからだしている。

スーダンの地方における医療・保健・衛生施設には，次の3つのランクがある。(1) nuqṭa al-ghiyār（直訳すれば，包帯交換所）――定員は，看護人（mumarriḍ）と用務員（farrāsh）の2人。(2) shafakhāna（診療所）――定員は，前二者の他に，医療助手（musāᶜid ṭibbī）がつく。(3) markaz ṣiḥḥī（保健センター）――さらに，産婦人科関係の専門家が加わる。このうち，マフムーダブにあるのは診療所である。定員が3人ついているはずなのではあるが，実質的には，ベルベル市出身の看護人のみが常勤している。投薬やマラリア解熱注射といった簡単な医療活動の他に，出生届け書類の受け付けやアトバラ市から定期的にやって来る予防接種医療チームへの対応など

↘ プラス6か月の懲役（1年間の執行猶予），泥酔事件の被告が40回のムチ打ちという判決であった。ムチ打ち刑は，判事たちが見守るなか，その場で執行された。実行したのは警官で，服のうえから罪人の背中や臀部をほどほどの力を入れて打った。

が主な仕事である。

マフムーダブのクラブは，村の青年男性たちにとって，欠かすことのできない娯楽施設であり，社交の場でもある。少額の登録料（86年では2ポンド）を払えば，誰でもメンバーになることができる。主な活動として，スーダンでもっとも人気のあるスポーツ，サッカー・チームの組織があげられる。クラブを土台にチームを編制し，コーチを雇い，ユニフォームを揃え，練習・試合日程を調整する。ちなみに，マフムーダブ・チームは，89年のダマル地区の4部リーグで準優勝をした。さらに，クラブ・ハウスは，夜間にはお茶をすすりながらテレビをみたりおしゃべりをしたり，トランプやドミノなどのゲームに興じることのできる娯楽の場ともなる。男性だけに限られるとはいえ，村の若者にとって，普段自分たちを監視している年長者の目から逃れ，仲間とともにきままな時間を過ごしうる貴重な施設である。

（d）宗教施設

マフムーダブの主な宗教施設として，モスクとハルワとがある。

モスクは村の宗教生活の中心である。イスラームにおいて，金曜日の正午過ぎの集団礼拝は，すべての信者に課せられた義務とされている。礼拝の呼びかけ（アザーン）に応じてモスクに集まり，説教師の説教をきいた後に，2ラカア（礼拝の単位）の礼拝をすることになっている。スーダン・マフディズムの信奉者であるアンサーリーたちは，イスラームの伝統的な正統四法学派のいずれにも属さず，独自のイスラーム解釈にもとづく教義を保持しているが，金曜日の集団礼拝は順守されている。ただ，別稿［大塚　1991b］でもふれたように，その開始時間が季節ごとに太陽の運行に応じて変化することなく，常に午後1時半に固定されているのが，この村（そしてスーダンの一部の地域）における特徴であるといえる。

この村の金曜礼拝の際の説教は，先にふれたように，ふつうはウンマ党の指導者AH が行なう。ただし，彼が不在のときなど，その息子のMAが代行したり，さらに89年にはオンドルマーン市からこの村に一時滞在していたウンマ党中央の有力指導者のひとり，UF が行なうこともあった。また，この村のモスクには女性専用の礼拝場所が設けられている。それはモスクの後部に，格子状の衝立に囲まれて設置されており，女性の礼拝者の姿が男性の視野に入りにくいようになっている。一般に，金曜日の集団礼拝に出席する村人は200～300人ほどであり，女性も20～30人は参加している。

現在のモスクは1970年に建造されたものである。予算の関係上，ふつうこの程度の規模のモスクには必ず設置されているミナレット（礼拝呼びかけ用の塔）はない。モ

スクの運営に関する役職者として，前述の説教師の他に，礼拝の度ごとに村人にその時を告げる礼拝呼びかけ人（ムアッジン）がいる。これは，村人のAAが行なうことになっている。彼が敬虔なムスリムであるところから，選ばれているのだという。とはいっても，彼自身は農業に従事しているので，特に昼間は畑にいることが多く，早朝や夕方および夜の礼拝の呼びかけしか行なわないことも多い。同じ理由で村人の多くは，特に昼間の礼拝などは，モスクではなく畑や自宅など思い思いの場所で行なうことがほとんどである。なお，政府から説教師とムアッジンにたいしては，一定の報酬が出ている。モスクの等級によって額が異なるが，86年時点ではAHとAAそれぞれに毎月64ポンド出ていたという。だが，彼らはそれを自分のものとはせず，モスクに付置されているハルワ運営の資金として，ハルワ委員会に提出していた。

ではハルワとはどのような施設であるのか。アラビア語のkhalwaは，ふつうスーフィー（イスラーム神秘主義者）などが俗世間から遠く離れて特異な儀礼を行なう「隠遁所」などといった意味で使われることが多い。しかし，スーダンではそれとは異なり，他の地域でkuttābやmadrasaなどと呼ばれている「クルアーン学校」を指すことが一般的である[cf. TRIMINGHAM 1949: 117]。つまり，スーダンのハルワは伝統的なイスラーム教育のセンターという意味を持っているのである。マフムーダブのハルワも同様である。

かつてマフムーダブのハルワは，現在女子小がおかれている場所に設置されていた。しかし，一時閉鎖状態になり，改めて1985年の3月にモスクの中庭の一部に新設された。再開直後には4人の教師がおり，300人ほどの生徒が学んでいたというが，その後教師も立ち去り生徒数も激減した。そして，86年の調査時には，スーダン西部，ダール・フール地方のニヤラ市近郊の村出身の者，総勢16名がそこに寝泊りし，クルアーン学習に明け暮れていた。彼らは12才から27才の若者たちであり，村人の援助を受けながら，自活をしていた。

このようなケース，すなわちスーダン西部の若者が一念発起してイスラーム学習を志し，相対的に豊かなナイル流域の町や村に居留し，クルアーン学習三昧になる例は今日ではそれほど稀ではない。彼らは，タラバ（ṭalaba）またはタラーミーズ（tarāmīdh），すなわち「学習者たち」と呼ばれたり，また，故郷を離れて学んでいるので，ムハージリーン（muhājirīn）すなわち「遊学者たち」と呼ばれたりしている。なお，スーダン西部地域は，後述するように（Ⅳ-6），「ターマ」と総称される農業労働者をこの地域に送り出してもいる。一方は宗教的，他方は経済的と動機は異なるが，いずれにしても，スーダン西部から北部への顕著なヒトの移動現象が見られるこ

とは興味深い。

一方，彼らを受け入れるマフムーダブ村の側にはハルワ委員会があり，ハルワの運営やムハージリーンへの援助のあり方を検討している。その資金は，原則的には，村の各家が一定額を拠出することになってはいるが，それは強制ではない。むしろ，篤志家の寄付に頼っているところが多い。

なお，86年において，村在住の子供で，稀にではあってもハルワに通ってクルアーンを学んでいたのはたった1名であった。さらに89年の時点では，3年前に住んでいたムハージリーンはすでに旅だっており，ハルワの利用者はいなかった。このように，マフムーダブのハルワは，今日では村人の子弟のイスラーム教育の場というよりも，外部から来訪する学習者たちの宿泊施設になっている。このような状態は，マフムーダブだけではなく，ナイル沿岸のこの地域のいくつかの町や村に見られる現象であるといえる。

なお，マフムーダブのハルワの運営は村人によって行なわれてはいるが，ハルワ施設そのものの監督は，北隣りのH村L地区に住むシャイフTが行なっている。実際，先述のダール・フールからのムハージリーンも，最初からマフムーダブをめざして来たのではない。ダマル市に着いてからTを紹介してもらい，さらにその斡旋でマフムーダブのハルワに住むようになったのである。

このシャイフTは，スーダン東部，カッサラ県のハムシュコレブ（Hamshukureb）地区にある大規模なハルワの出身者である。そのハルワは，ベジャ人のシャイフ・アリー・ベタイ（Alī Bitāy）が設立したものであり，数多くのクルアーン教師を輩出している。実際，マフムーダブのハルワのみならず，ダマル地域さらにはアトバラ川沿岸地域の点在する多くのハルワには，ハムシュコレブ・ハルワ出身のクルアーン教師によって管理・運営されているものが多い。

3. 「親族」集団

小稿は第Ⅳ章において，マフムーダブにおける灌漑農業をめぐるさまざまな社会関係にふれる。そのためには，同村の社会関係を大きく規定する「親族」集団について，その概略を説明しておかなければならない。ただし，マフムーダブにおける「親族」集団のあり方を充分に論じるためには，個々の具体的事例を提示し，比較の視点に立った理論的考察を加えなければならない。筆者は稿を改めて，中東の親族構造をめぐるさまざまな議論を整理し，そのなかにマフムーダブの「親族」集団を位置付ける予定である。したがって，ここでは小稿での議論を進めるうえで最低必要と思える範囲

内で，マフムーダブの「親族」集団を説明しておく[11]。

マフムーダブ村の内部的な社会区分として，ファリーグ（farīq）またはハイイ（ḥayy）と呼ばれるものがある。ファリーグは，「分ける，分割する，区分する」などの意味をもつ動詞 faraqa から派生してきた言葉で，「組，チーム，隊」などの意味をもつ。一方，ハイイの方は「生きる，生活する」などと訳しうる動詞 ḥayiya を語根とし，「生きること」といった意味の他に，都市などの内部の居住区域＝街区を指す場合もある[12]。

このようなハイイの用法から類推して，この言葉によって言及される集団もしくはカテゴリー[13]が，一定の地区＝区域に住む人々から構成されており，したがってハイイは純粋な地縁原理にもとづく「近隣集団」であると考えてしまうと，それは誤りとはいえないまでも，この集団の一面しか見ていないことになる。なぜならば，(1) ファリーグやハイイは，地図のうえで明確に境界線が引ける集団ではなく，(2) さらに，地縁以外の要素もそれらの集団編制の際には関与してくるからである。

マフムーダブの人々に，同村に幾つのファリーグもしくはハイイがあるか尋ねた場合，誰に聞いても常に一定の数字が得られるわけではなく，回答者によって異なった数が返ってくる。すなわち，インフォーマントによって，列挙するファリーグもしくはハイイの区分そのものが異なってくるのである。したがって，あたかも今日の国際社会における国境線，もしくは日本社会における町名区番の境界線のように，図2で描いたマフムーダブの屋敷地配置の平面図に線引きをして，各ファリーグもしくはハイイごとに明確に区分していこうと試みても，それが不可能なのである[14]。

さらに，マフムーダブの人々は，ファリーグもしくはハイイとは何かという，抽象的議論や一般的定義をしない。そのかわり，いくつかの具体的な集団名をあげ，それがマフムーダブ内のファリーグもしくはハイイであるという言い方をする。そのよう

11) 中東の親族集団をめぐる議論の日本語による批判的総括としては，堀内 [1984, 1990] や D. アイケルマン [1988: 101–161] のものなどがある。

12) イスラーム都市論における「街区」分析の重要性については，三浦の報告 [1990] などを参照のこと。

13) 社会人類学的議論において，R. キージング [KEESING 1975: 9–11] などが指摘するように，「集団」と「カテゴリー」の概念的区別は重要であるが，ここではその問題には立ち入らず，すべて「集団」の用語で統一する。これら両概念の区別ならびにスーダンの事例にそれをどのように適用すべきかは，別稿で論じたい。

14) ここで興味深いのは，D. アイケルマンがモロッコの地方都市を調査したさいに，町の人々に街区の数を訪ねると，30から43までのさまざまな数字が答えとして帰ってきたという事実である [1988: 329]。彼によれば，街区は「客観的」な基準ではなく，町に住む人々の「主観的」な思いにより定められるものであり，したがって，発言者によってさまざまな認知の相違が現われうるのである。マフムーダブのファリーグもしくはハイイにも，同じことがいえると思われる。

な固有名としてあげられたものは，いくつかのものを除き，多くは人名などに「—アブ」という接尾辞を付けたものである。そもそも，マフムーダブという村名自体も，マフムードという人名にアブという接尾辞が付いて成立したものなのである。

このアブという接尾辞は，スーダン・アラブ史の権威ユーセフ・ファドル・ハサンによれば，元来ベジャ語の接尾辞であり，「家族 family や氏族 clan」を意味するものである [Hasan 1967: 142]。つまり「血縁」的な関係をもつ人々の集団を指すものと考えられる。実際，マフムーダブの村人の多くは，自分たちの先祖をマフムードという人物と見なしており，自分たちはその子孫であると考えている。同様のことは，それぞれのファリーグもしくはハイイを構成している人々の多くも認識していることである。その意味において，「—アブ」という名前を共有する人々は，先祖を共有する親族集団を構成しているということができる。

他方において，たとえばマフムーダブは，明らかに「村」すなわち地縁集団の名前である。そして，そのなかには，近年母方的もしくは姻戚関係を通して村民となった者，さらには使用人や労働者という形で居住している「よそ者」も含まれている。この意味において，「—アブ」という集団は，「地縁」集団とみなすことも可能なのである。

さらに付け加えれば，今日のスーダンにおいて，「—アブ」という用法は，まったく血縁・地縁関係をもたない集団にも適用されている。たとえば，全国レベルで人気のあるサッカー・チーム，ヒラールのファンは，「ヒラーラブ」と呼ばれているのである。

このように，マフムーダブにおいてファリーグもしくはハイイと呼ばれている集団，具体的には「—アブ」などの固有名で呼ばれている集団は，ある意味では「地縁」的であり，別な場合は「血縁」的であり，さらにはある種のクラブ的な要素によって結び付いた「約縁」的集団を指すともいえるのである。

このような問題点が含まれていることを充分に自覚したうえで，小稿では，ファリーグもしくはハイイと一般に呼ばれ，さらに「—アブ」などの固有名で語られるマフムーダブの諸集団を便宜的に「親族」集団と呼び，以下の記述を進めていきたい。

Ⅲ．灌漑体系と土地利用の諸形態

1．　農業用水源としてのナイル

北部スーダンにおけるアラビア語の語彙のなかで，季節を表わすものとして次の3

つがある。シター（shitā）は10～11月ごろから始まり1～2月ごろまで続く，温度が下がり乾燥した「冬」である。2～3月から4月ごろまでは，温度がもっとも上がるサイフ（ṣaif）すなわち「夏」である。そして，5月ごろから9～10月ごろまでが，少量とはいえ雨の降る「雨季」であり，彼らはハリーフ（kharīf）と呼んでいる[15]。

マフムーダブの北隣り，H村の農業試験所内には測候所がある。そこから得た1986年1月から89年10月までの気温と降水量のデータは，表1のとおりである。マフムーダブの気候もほぼこれと同じものと考えて差し支えないであろう。なお，このなかで，1988年の「雨季」は，例年とは比較にならない多量の雨がこの地域に降り，大きな洪水の被害をだしたことに注意しなければならない。したがって，88年のデータは，きわめて特殊なものとみなす必要がある。

このように降雨時期が限定され，その絶対量も少ないマフムーダブなどナイル沿岸の農業地帯は，その農業用水のかなりの部分を，大河ナイルに依存している。後にふれるように，最近では，掘り抜き井戸からの地下水を利用した耕作も可能になってきているが，それでも灌漑農業を行なううえでナイルがきわめて重要な役割を果たしている事実には変わりはない。

夏雨地帯を水源とするナイル川は，毎年7～9月ごろに増水する。マフムーダブにおいて，ふつうの年でも農地の一部（後にふれるジャリフ地）がこの期間には冠水する。さらに，増水の激しい年には，川から1キロ以上離れた土地まで，水に覆われることがある。すでにふれたように，1946年の洪水が，マフムーダブの多くの住民に居住地を変える決心をさせるきっかけになったのである。また，88年の洪水のおりには，上マフムーダブの近くにまで水が押し寄せた。下マフムーダブの住民は土手を築いて水の浸入をくいとめ，上マフムーダブの村民はボートなどを利用して，食料品を含む生活必需品を下マフムーダブに届けたという。

2. 灌漑方式

マフムーダブにおける農地への灌漑方式には，ナイルから直接行なうものと，井戸からの地下水を利用するものとの2つがある。

ナイルからの灌漑とは，基本的に，低い位置を流れる川の水を汲み上げ，高い場所にある畑に給水するものである。それにはさまざまな装置が考案されてきた [大塚1989]。今世紀までは，サーキヤ（sāqiya）と呼ばれる木製の水車を用いたものが，

15) 四季のあるエジプトなどのアラビア語の用法では，「ハリーフ」は通常「秋」と訳される。ちなみに，春夏秋冬はそれぞれ，rabīʿ, ṣaif, kharīf, shitā と呼ばれる。

表1　気温と降雨（1986年1月～1989年10月，H村測候所の資料より）

	気温 (°C)			降雨		
	最高	最低	平均	雨量(mm)	回数 微量*	回数 本格降雨
1986年1月	30.4	14.1	22.5	0		
2月	33.4	14.9	24.2	0		
3月	38.0	19.7	28.9	0		
4月	38.2	20.4	29.3	0		
5月	40.2	22.7	31.5	0		
6月	42.4	27.3	34.5	微量	3	0
7月	41.1	26.7	34.1	13.1	0	3
8月	41.5	27.0	34.2	0		
9月	40.7	26.4	33.7	22.9	1	4
10月	37.2	25.3	32.2	微量	2	0
11月	34.4	19.1	26.8	0		
12月	28.4	13.2	20.9	0		
1987年1月	30.6	14.2	22.4	0		
2月	33.5	16.2	24.8	微量	1	0
3月	35.5	17.4	26.5	微量	1	0
4月	38.9	21.9	30.4	0		
5月	40.9	26.5	33.7	0.3	2	1
6月	43.0	27.0	35.0	4.4	0	1
7月	43.2	29.0	36.1	0		
8月	40.5	26.5	33.5	41.6	0	2
9月	43.2	27.7	35.5	3.4	2	2
10月	39.2	25.2	32.2	1.3	0	2
11月	36.0	20.3	28.1	0		
12月	30.5	15.7	23.2	0		
1988年1月	29.5	13.7	21.6	0		
2月	30.6	13.8	22.4	0		
3月	37.0	19.3	28.2	0		
4月	40.1	21.4	30.7	0		
5月	43.4	27.3	34.9	0		
6月	43.2	29.7	36.4	0		
7月	39.9	27.7	33.8	18.0	0	2
8月	36.6	25.5	31.1	212.7	4	7
9月	40.5	26.7	33.7	2.5	1	2
10月	39.2	24.9	32.1	6.8	0	3
11月	34.9	19.1	26.3	0		
12月	32.5	17.0	24.7	0		
1989年1月	26.7	11.3	19.0	0		
2月	28.2	12.3	20.3	0		
3月	34.1	16.7	25.4	0		
4月	39.6	21.2	30.4	0		
5月	42.2	26.8	34.5	25.6	1	2
6月	43.4	27.7	35.5	0.8	2	1
7月	42.2	28.1	35.1	0		
8月	41.4	27.8	34.6	1.5	0	1
9月	41.9	27.3	34.6	25.0	7	1
10月	38.8	23.5	31.2	微量		

* trace → ごく微量で，雨量として計測できない降雨

もっとも効率的な装置であった。これは，原理的にいえば，水平方向と垂直方向とに回転する2つの水車を組み合わせたものである。最初に，水牛などの畜力を利用し，水平方向に水車を回転させる。そして，この運動を，歯車の噛み合わせによって第二の水車に伝え，垂直方向への円運動へと転換する。その第二の水車と連動する形で，第三の水車が取り付けられているが，それには第一・第二とは異なり，歯車部分がない。そのかわりに，第三の水車の縁の部分には，素焼きの壺など水を汲み上げる容器が10個ほど取り付けられている。この水車が，垂直方向の円運動を行なうことによって，周囲に付けられた壺も円を描きながら回転し，下方にある川もしくは大きな運河から水を汲み上げる。その壺が水車の上部に昇り，最高点に達したときに壺が傾き，その内部を満たしていた水が耕作地への給水路へと流れおちるような仕掛けを作っておく。このような仕組みによって，畜力を利用し，下方の水を上方の耕地へと絶え間なく送り込む装置が活用されるようになる。

このサーキヤそのものは，すでに古代のプトレマイオス朝時代からナイルで利用されていたことが知られている。現在でも，まったく同じ仕組みのものが，エジプトのナイル・デルタの農業地域などでは数多く見られる。もっとも今日では，水車そのものや水を汲み上げる容器が鉄製のものとなり，小型化されながら効率は格段と向上しているのではあるが [大塚　1983]。

マフムーダブに話を戻そう。ナイルからの灌漑装置としてのサーキヤは，1985年ごろまでは一部で使われていたというが，今日のマフムーダブではまったく用いられていない。そのかわりに，彼らはディーゼル・エンジン（bābūr）を回して，ポンプ（ṭurumba または ṭulumba）を作動させ，ナイル川から水を汲み上げる装置によって灌漑を行なっている。

マフムーダブにディーゼル・ポンプが初めて導入されたのは，1940年代のことである。そして，それを用いた大規模なナイル灌漑プロジェクトが実現したのが，50年代の初頭である。1989年時点で，マフムーダブの村人が所有するナイル灌漑ポンプは，後に詳しく述べる大規模プロジェクト（HA 計画）の他に7つある。

ディーゼル・ポンプは，ナイルからの灌漑にのみ使用されているのではない。今日では深さ8メートルほどの井戸を掘り，そこにポンプを設置し，地下水を汲み上げて周囲の土地を耕地化することも盛んに行なわれている。なお，このような掘り抜き井戸の利用により生まれた農地は，一般にマタラ（matara）と呼ばれているが，その語源は英語の motor であるといわれている。

ポンプの活用により，サーキヤのみが用いられていた時代には耕作できなかった土

地も利用可能となり，マフムーダブ村民の土地利用の形態も大きく変化した。そのことを次節で詳しく説明しよう。

3. 土地利用の諸形態

これまでにいくつかの給水方式を紹介し，さらに灌漑装置におけるサーキヤからディーゼル・ポンプへの変化についてもふれた。このような給水方式ならびにそれに付随する土地所有のあり方の相違によって，マフムーダブの周囲の土地は，ジャリフ（jarif），ジャジーラ（jazīra），カルー（karū），ハラー（khalā）の4つの種類に大別されている。そのことを少し詳しく見ていこう。

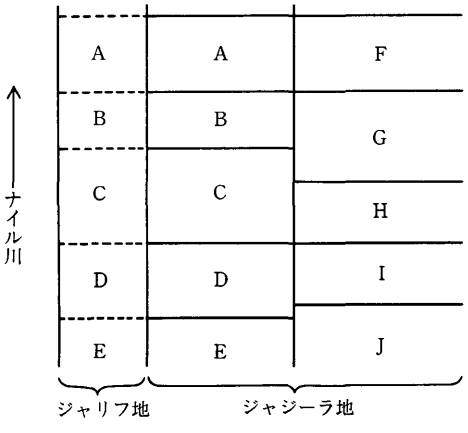
(a) ジャリフ地

ナイルに接し，毎年ナイルの増水期に冠水する土地を，マフムーダブの人々はジャリフと呼んでいる。これは，川岸にそって帯状に続く土地であり，幅は広いところで100メートルほど，狭いところでは数メートルしかない。ジャリフ地は，増水期に数か月にわたり冠水し，たっぷり水分を土中に含ませるところから，原則的に，水が引いて耕作を行なうときでも特別に灌漑装置を用いて給水することがない。さらに，ナイルの増水は水分のみではなく，上流から養分を含んだ土壌をも運んでくる。したがって，ジャリフ地には施肥の必要もない。

ジャリフ地の耕作は，ナイルの水が引きだし，水分を含んだ土壌が露出し始めた10月ごろから開始される。ふつう，掘り棒（sallūka）を用いて地表に穴をあけ，そこに種子を撒き，そのまま成長させる（写真1）。主に飼料になる豆類（lūba）の他に，カボチャ（qara^{c}）などの自家消費用の野菜を植えることが多い。またジャリフ地のなかでももっとも川から離れ，次に紹介する土地



写真1　ジャリフ地の堀り棒による耕作



＊ アルファベットは土地所有者

図4　ジャリフ地ジャジーラ地の所有者の関係（模式図）

区分であるジャジーラ地に接した場所の一部には，小さな灌漑用水路が築かれて定期的に給水され，ネギ（baṣal）の苗床（ḥūḍ al-tīrāb）などが作られることもある。

ジャリフ地は，それに隣接したジャジーラ地の所有者が，その所有権をもっている。すなわち，ジャジーラ地は一般に，ナイルに平行な辺が短く，垂直な辺が長い長方形の土地を1区画として，個人に所有されている。その2つの長辺をそのままナイルに向かって延長し，それら2本の線と川ならびにジャジーラ地との境界線によって囲まれた四角形のジャリフ地が，それに接しているジャジーラ地と同じ人物によって個人的に所有されているのである（図4）。

（b）ジャジーラ地

ジャジーラ地とは，増水期に冠水するジャリフ地より一段と高くなった土地であり，かつてはサーキヤで，今日ではディーゼル・ポンプでナイルからの灌漑が行なわれ，農地として活用されてきた土地である。なお，ジャリフ地とジャジーラ地との境となる段差の部分は，ギーフ（gīf）と呼ばれている[16]。

サーキヤ灌漑の時代，ジャジーラ地には数多くのサーキヤが設置されていた。給水路網の関係から，その土地区分けは，図4で示したように，ナイルに平行する辺が短く，垂直の辺が長い長方形を区画単位として，個人的に所有されていた。そして，隣接するいくつかの区画が共同でひとつのサーキヤを設置し，給水の順番を調整していたという。そのため，今日でも，ジャジーラ地の土地区分けの単位として，サーキヤという言い方が使われている。これは，灌漑のための水車を指すというより，かつて共通のサーキヤで給水していた異なる所有者に属するいくつかの土地区画をひとまと

16）この語彙はベジャ語起源である。この他，北スーダンの農業用語，生活用語などのなかに，ベジャ語やヌビア語起源のものがかなり入っている。アラビア語スーダン方言の辞書 [Qāsim 1985] を参照。

めにして，1サーキヤと呼んでいたことの名残である。

イスラーム法（シャリーア）の相続方式によれば，親の財産は子供たちに均等に——ただし，娘の取り分は息子のそれの半分になるが——相続される。そこで，私有地であるジャジーラ地は，どうしても土地が細分化される傾向にある。この地の耕作は，所有者本人がその子供・兄弟などの近親の協力をえて，自分で行なうことが多い。栽培する作物，農作業のプランなども耕作者本人の意思によって決定される。ポンプ灌漑が導入される以前，村人の主たる耕作地であったジャジーラ地では，マフムーダブをはじめ北スーダンの人々の食生活に欠かすことのできない種なしパンの原料である小麦やソルガムが耕作されていたと考えられる。だが，今日ではそれらはジャジーラ地よりさらに川から離れたカルー地で大規模に作られることが多い。そこで，ジャジーラ地では，ヘンナ（ḥinnā，後述）や飼料（クローバーやソルガムの一種），さらにネギその他の野菜類など，市場に出荷しやすい換金作物がよく耕作されている。

(c) カルー地

かつて，サーキヤがもっとも効率の良い灌漑装置であった時代には，ジャリフ地とジャジーラ地のみが可耕地であった。それよりも川から離れ，サーキヤの揚水力ではナイルの水を届かせることのできない広大な土地は，農業の面ではまったく不毛の土地であった。しかし，ディーゼル・ポンプの導入が，この状況を一変させた。

今日の上マフムーダブ村とジャジーラ地とにはさまれた土地は，カルー地と呼ばれており，かつては未耕地であった。しかし，ポンプ導入により，一部はナイルからの灌漑による給水網のなかに組み込まれ，一部は井戸を掘ってポンプ灌漑をする農地（マタラ）に生まれ変わった。

カルー地が農耕地になったのは，ポンプ導入後，マフムーダブの場合は1940年代以降のことである[17]。この年代は，カルー地における農耕を検討する場合に重要な意味をもっている。というのも，スーダンの土地所有制度は，20世紀の初頭に大きな変化を経験したからである。

19世紀以降のスーダン近代史は，1820年代のエジプトのムハンマド・アリ王朝の侵攻から始まる「トルコ＝エジプト支配」時代，1880年代中葉から98年にかけての「マフディー国家」時代，マフディー国家崩壊後の「イギリス＝エジプトの共同統治」す

17) ナイル対岸にあるゼイダブの大農場は，スーダンでももっとも古くから大規模綿花栽培が試みられたところであり，すでに20世紀初頭には，ポンプを利用した灌漑プランテーションが成立していた [cf. Ahmad 1975]。

なわち実質的なイギリス植民地時代，そして1956年以降の「独立国家」の時代と大きく分けられる [cf. HOLT & DALY 1979]。土地制度に関してここで問題なのは，共同統治のごく初期の時代に出された一連の布告である。それによれば，スーダンの地方の土地は，それまでに土地（農地）所有者もしくは耕作者が明白であったところを除いて，すべて政府の所有と見なすと定められたのである [DALY 1986: 210–4]。これによって，それまでに所有者が明確であり，実際に耕作されていた土地（マフムーダブの用語では，ジャリフ地とジャジーラ地）以外の土地（カルー地など）は，国有地とされてしまったのである。

カルー地が開墾不可能な土地であった間は問題がなかった。しかし，ディーゼル・ポンプという新技術の導入により，そこが可耕地となった時点で，その広い土地を政府から借り受け，農地として利用していこうとする計画がたてられた。

マフムーダブの場合，最初のポンプ導入は1943年のことであった。当時，村は現在の下マフムーダブの位置にあった。そこから500メートルほど離れた未耕のカルー地を，2家族がそれぞれ政府に申請し，借地耕作権を得たのである（後に掲載する図5の土地区画図のなかの，33と38の土地）。彼らは一定の登録料を支払い，税金を納めることを条件として，自分たちに割り当てられたカルー地の区画内に井戸を掘り，ポンプを設置しマタラ耕地にしたのである。

マフムーダブの村レベルでの大きな転機は1940年代末に来た。その当時，村随一の有力者であり，地域のウンマ党の幹部のひとりでもあった HA が，オンドルマーンにあるアンサーリーの最高指導者（イマーム），アブドゥル＝ラフマーン・アル＝マフディーの事務所を通し，大型ポンプ2台（8インチと6インチ）を導入しようと企てたのである。その計画は，指導者の名前を取り HA 計画（mashrūᶜ HA）と呼ばれた。HA が亡くなり，その息子の AH が計画の総責任者となっている今日でも，当時と同じ名称が村では通用している。

HA 計画を実現していこうとする過程で，アンサーリーとそれに対立する宗派（ハタミーヤ教団）がほぼ同数である隣の J 村との深刻な土地争いなども生じたようである[18]。しかし，最終的にマフムーダブは，HA のリーダーシップのもと，おおよそ300フェッダーン（1フェッダーンは約4,200m²）に及ぶ土地を灌漑するディーゼル・ポンプ計画を1951年に完成させた。そのうち6割弱がジャジーラ地であり，そこではサーキヤ給水からポンプ給水に切り替えられた。そして，残りがカルー地であり，そ

18）ハルトゥームにある国立古文書館には，この争いをめぐるイギリス側の資料が保存されている。古文書番号 "Northern Province 2–16–213"。

こはHAの名前で政府に登録し，借地耕作権を得た[19]。HAは，新たに政府から借り受けたカルー地を区分けし，それぞれの区画の耕作権を村人個人個人に与えた。この方式は今日でも踏襲されており，1989年時点で延べ72人の村人が，カルー地の耕作権を得ている。これらの結果，水の提供者（HA）と土地の耕作者たちとの間に，収穫した作物の利益を分配する取り決めが結ばれるようになったのであるが，その問題はⅣ－2で論じたい。

ここで，HA計画全体の地図を見ておきたい。図5は，1964年5月27日に作成された地図であり，ダマル市の測量局に保管されていたもののコピーである。縮尺は筆者が書き加えたものであるが，それ以外はすべて原図のままここに掲載する。

若干の説明を加えれば，図で“Haddam line”とされているところがギーフであり，ジャリフ地とジャジーラ地との境界線になる。したがって，それよりナイルよりの土地はジャリフ地である。そして，図の上部の8aの区画とそれに隣接する8c, 8d, 9c, 9dから左下の20, 22, 24に至る，ナイルと平行して走る帯状の部分が，HA計画のポンプで給水されているジャジーラ地になる。また，図の区画番号29の一部および31, 33, 34, 38, 40，すなわち“Govt.”と記されているところの周辺がカルー地である。先に記したように，このうち個人的に国有地を借り受け，みずからポンプを設置し，家族労働と若干の賃労働で耕作している33, 38の2区画を除き，他はすべてHA計画の一部となり，HAのポンプから給水を受けている。

なお，今日の観察と比較して，この地図にはいくつか注意しなければならない点があることを指摘しておく。ひとつは，“Govt.”と指定されたカルー地の東側の境界線は図のような一直線ではなく，一か所で外側に折れ曲がっている。ここは，H村の農業試験所に属する実験農場と接しており，この30年ほどの間に境界線が変動したことも考えられるが，測量ミスの可能性もある。また，図では狭いジャリフ地になっている3A, 3Bから12Aにかけてのナイル沿いの土地は，現在では幅500メートルを越すジャジーラ地になっている。この場合は測量ミスというよりも，ナイルの堆積作用の結果といえよう。このように，この地図のジャリフ地に関する部分は今日の姿とはかなり異なるところがあり，またカルー地に関しても一部相違があるが，ジャジーラ地についてはある程度信頼できるものといえよう。

現在，HA計画からのポンプで給水しているカルー地では，HAの息子であるAHの指導のもと，小麦（qamḥ），ソルガム（dura または zura），ソラ豆（fūl miṣrī）な

19）ダマル市の測量局に保存されている1964年作成のHA計画の地図（図5の原図）によれば，ジャジーラ地は167.44フェッダーン，カルー地は138.04フェッダーンと記されている。

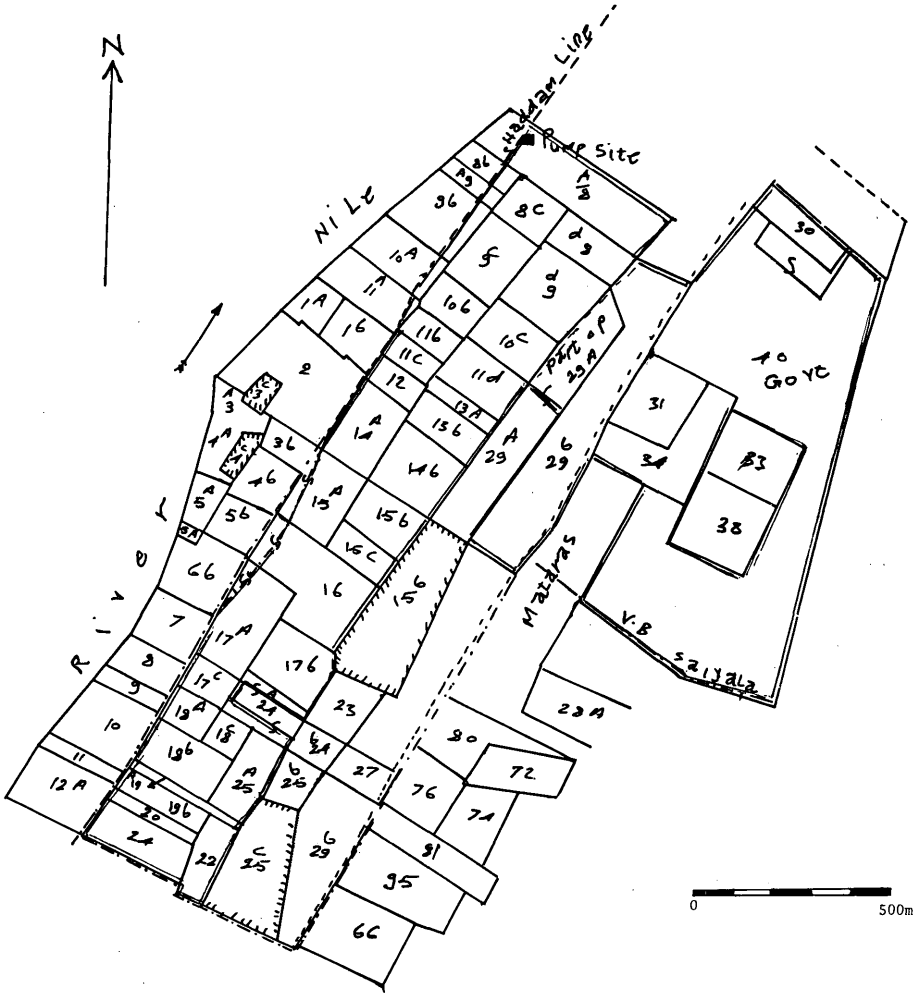


図5　ダマルの測量局が作製したHA計画の地図

どの大規模耕作が行なわれている。毎年，作付けされる作物が彼によって定められ，耕作権をもつ村人はそれに従って作業をする。そして，地味を枯らせないため，2～3年に1度の割合で一部の土地を休耕させることになっている。なお，その年休耕する土地も，トラクターで耕し起こし，地中に日光を入れるように心がけるという。このような休耕を取り入れた数年単位の農耕サイクル（**daura zirāʿiya**）は，農地が細分化されているジャジーラでは行なわれていない。

一方，個人ベースで政府に登録し，耕作権を入手するカルー地のマタラ（掘り抜き井戸による灌漑農地）では，ジャジーラ地と同様に，耕作者独自の判断にもとづき農

作業が進められる。飼料用のソルガム（ʿīsh baladī）やクローバー（barsīm）のほか，ネギなど主に市場向けの野菜栽培が行なわれている。

（d）ハラー地

以上は，上マフムーダブとナイルに挟まれた土地・農地に関するものである。それにたいし，村の東部には，ハラー（khalā）と呼ばれている未耕の沙漠地域が広がっている。つい最近まで，マフムーダブの人々はそれらの国有の土地を農地として利用していなかった。しかし，1985年ごろから一部の村人が個人ベースで国家に登録料を支払い，村から2.5～3キロほど離れたハラー地の一部の耕作権を手に入れ，農地として使用するようになってきた。当然ながら，井戸を掘り，ポンプによって地下水を汲み上げ灌漑するものであり，その農地は，カルー地の場合と同じくマタラと呼ばれている。

ハラー地におけるマタラ耕地利用の実態，ならびにそれに要する費用を知るために，AmI の場合をみてみたい。彼は，85年に10フェッダーンの土地の借地耕作権を500ポンドの登録料（rusūm al-tasjīl）を払って入手し，さらに6フェッダーン分も追加分（iḍāfa）として手に入れた。契約期間は10年であり，更新も可能である。彼が最初に行なったことは，村の近くでキャンプをしていたベジャ系ハデンドワ人（Hadendowa）の遊牧民を雇い，井戸を掘らせたことである。労賃は1ラージル（rājil）[20]当たり50ポンド。4人がかりで15日かかって4.5ラージル（約8メートル）の井戸を掘った。それからそこに，インド製のディーゼル・ポンプを設置し，畑に給水を開始した。なお，そのポンプは，84年に2,850ポンドで購入したものだという。

以上は，86年の調査の際に AmI から直接聞いて得た数字である。そして，89年に再会したときに彼は，もうひとつ別な井戸を自分が借り受けたハラー地に掘らせていた。その際の手間賃は，1ラージル当たり330スーダン・ポンドであるといった。また，ポンプも，13,500ポンドに上がっていた。

なお，このように労賃が4年間で6.6倍と急上昇した説明として，彼はエコロジカルな理由をあげた。すなわち，彼が最初の井戸を掘った85年には沙漠の乾燥が激しく，ハデンドワ遊牧民はナイル流域の村落地帯に大勢集まってきていた。したがって，人手が豊富であり，比較的低賃金で彼らを雇うことができたのである。それにたいし，88年にスーダンを襲った大雨のため，89年には彼らの多くは東部の沙漠地帯に移動し，

20）約174センチ・メートル。これはほぼ成年男性（スーダン・アラビア語で，ラージル rājil）の身長に匹敵するといわれている。

したがって遊牧民の労働力が相対的に不足になり，結果として賃金の大幅な上昇を招いたというのである。また，インドから輸入しているポンプの値段の上昇は，国際通貨市場におけるスーダン・ポンドの価値の下落によるところが大きい，と彼は考えていた。

AmIは，ハラー地のマタラにおいて，飼料用ソルガム，野菜，小麦などの栽培を行なっている。そのうち，小麦畑の一部を，隣村にある農業試験所のパイロット・ファームとして使用させている。耕作は試験所の職員が行ない，AmI は土地——正確には，その耕作権——を貸すだけである。収穫物は，実験資料となる一部を除いてAmIのものとなる。また，耕作に使用した水の費用に関しては，農業試験所側が，一定金額をポンプの所有者であるAmIに現金で渡すという。

このマタラ耕地での主たる労働力は，彼とその父親 IAm である。農業試験所の電話交換手をしている IAm は，時間があけばハラーのマタラ耕地に出かけている。一方，AmIはJ村の男子小学校の教員であり，放課後や休日である金曜などに耕作をしている。



土地の名称	jarif	jazīra				karū			khalā
所有形態	私有地					国有地			国有地
給水方式(旧)	ナイル(氾濫)	ナイル(水車)				未耕地			未耕地
給水方式(新)	ナイル(氾濫)	ナイル(ポンプ)					井戸(ポンプ)		井戸(ポンプ)
		HA		SA					
				(ネギ)	(その他の作物)				
給水者	−	1/2	7/16	1/4	1/3	+	+		+
土地の所有者	+	+	1/8	1/8	1/8	−	−		−
登録者	−	−				+	+		+
用益権所有者	− 1	− 1/2				+ 1/2	− 1		− 1
耕作者	+	+	7/16	5/8	13/24	+	+		+

＋はその土地区分のところにその権利をもつ者が存在することを示し、－はそれが存在しないことを示す。

┤は同一人物がそれらの役割を兼ねていることを示す。

図6　土地の区分と収穫者分配の取り決め

以上が，マフムーダブの村人が主として耕作している土地の区分の説明である。灌漑方式ならびに所有形態の相違と組み合わせて整理して図示したものが図6である。なお，図の下半分に書かれている収穫物配分方式に関しては，Ⅳ-2で改めて詳しく述べる。

4. 畑作りと給水

次に，実際の畑作りの過程と給水のやり方を，具体的に順を追って紹介する。

(a) 畑作り

マフムーダブにおいて，灌漑を行なう必要のないジャリフ地――そこでの掘り棒を使う耕作はすでにふれた――を除く，ジャジーラ地と，カルー地のナイル灌漑耕地，そしてカルー地とハラー地のマタラ耕地は，おおよそ次のような4つの段階をふんで畑として整地され，播種ができるようになる。

(1) 犁耕（ḥart）――畜力もしくは機械を用いて，前回の収穫の後放置されていた農地を犁（maḥrāt）を用いて耕す。畜力としては，牛が2頭一組になって利用される。トラクターは，耕地面積の広いカルー地やマタラ耕地で使われる場合があるが，村には数台しかなく賃貸されることが多い。ちなみに賃貸料は，耕地1フェッダーン当たり，1985年では25ポンドほど，86年では30～35ポンドほどであったという。また，面積単位ではなく，使用時間単位で貸すこともあり，86年には1時間当たり50ポンドで貸与されていた[21]。そして，89年には値上がりが激しく，1時間当たり100ポンドほどとなっていた。

なお，犁耕の後に，前回栽培した作物の根や茎が畑にかなり残っている場合，大型の金属製熊手（shambāka）をトラクターにつけ，それらを除去する作業（shimbīkと呼ばれる）を行なうこともある。

(2) 地ならし（qaṣṣab）――ガッサービーヤ（qaṣṣābīya）と呼ばれる木枠を用いて地面をならし，平らにする。これは畜力に頼り，やはり牛2頭を用いる。

(3) 畑の区分け（qaṭa^{c}）――大きな水路は既に設けられているが，畑に直接つながる小さな水路はこの段階から作られる。畑を小区画（ホードと呼ばれる）に分ける

21) 一般に，一時間では2フェッダーンほど耕すことが可能であるといわれている。したがって，計算上は，面積あたりではなく，時間あたりで借りたほうが「経済的」に有利であると「われわれ」は考えがちである。だが，そのような質問をしても，彼らはそれほど目立った反応をしない。これなども，彼我の「経済合理性」の相違を考える場合のヒントになるであろう。



写真2　ワースークによる畑の地ならし

ために，犂を用いて耕地に深く溝を刻みこみ，線引きをする。そこでできた小さな土盛りの部分と溝の部分が，それぞれ畦と水路との目安となる。

(4)畦の土盛り（raf^{c}）——次に，ワースーク（wāsūk）という道具を用いて，畦（tagnat）の部分にきちんと土を盛り上げ，水路も広げる。ワースークは，木製の小型地ならし道具であり，2人一組になって使う。ひとりが柄をもち，もうひとりがそれに付いたヒモを引っ張り，協力して作業をする（写真2）。

(b) 畑への給水

次に，給水のやり方を簡単に説明しておきたい。図7は，先にふれたHA計画の水路の概略図である。これは，86年調査時に，HA 計画のポンプからの給水網を調べ，それを先に掲載した図5に書き込んだものである。ここで，大と中の給水路の位置はほぼ正確であるが，小水路に関しては，作図上からも大まかな水の流れの方向のみを記した。したがって，この図の小水路の数・長さなどは正確ではない。

図のダナブ danab 水路（ナイル増水後の農作業開始の時期には，土砂で埋まったこの水路を堀り起す共同労働＝ナフィールが必要となる。そのことについてはⅣ−4でふれる）から取り入れられたナイルの水は，ポンプで吸い上げられ，そこから図のような流れを通して，それぞれの耕地区画に配分される。ポンプの操作に関しては，AHの屋敷地に居住している，オンドルマーン市出身のHBが責任をもっており，農

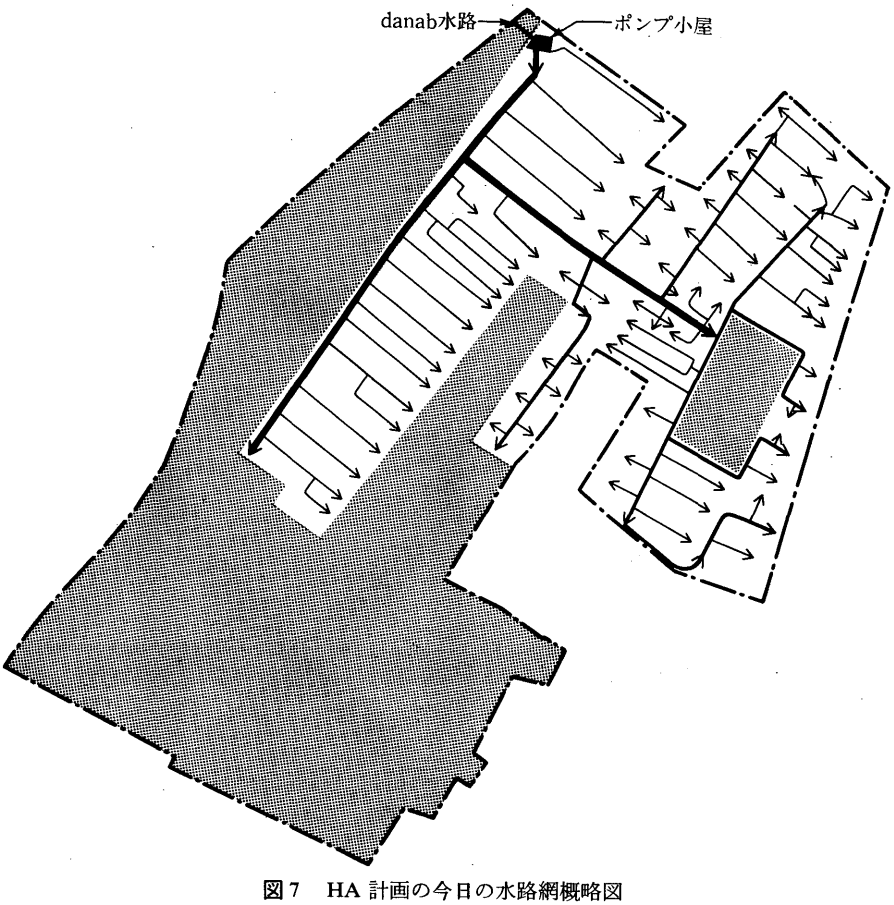


図7　HA 計画の今日の水路網概略図

繁期の10～12月ごろなど，彼は毎晩ポンプ小屋に泊まり込み，寝る間も惜しんでポンプを回すほどの忙しさである。

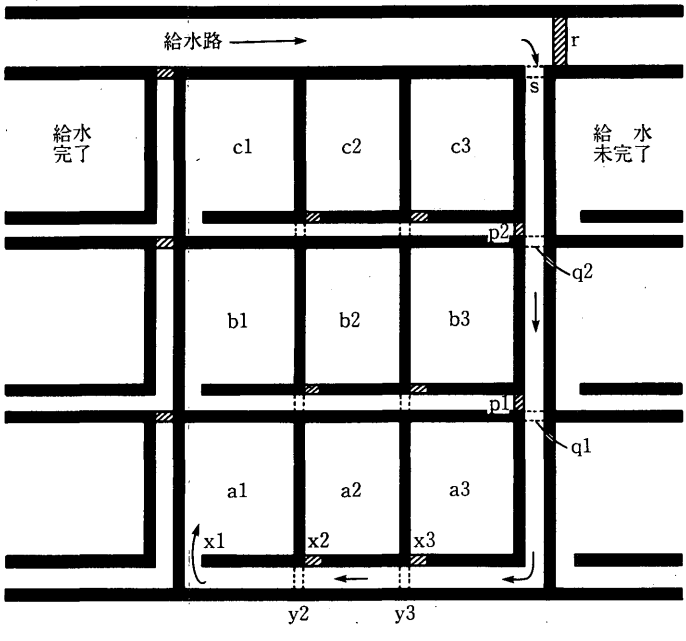
なお，図7とそのもとになった図5とを比較すれば明らかになるように，今日の HA 計画の給水網は，かつてのそれよりも規模が小さくなっている。図5の原図が描かれた1964年に HA から給水を受けていたと思われる 17a, 17b から22, 24に至る帯状の地域（図7ではアミをかけている）が，今日では HA 以外のポンプから水を提供されている。これは，近年ポンプの個人所有者が増え，HA 計画に依存しなくても耕作できる者の数が増加してきたことを示している。

また，各畑に給水する水路は，幅の広狭にかかわらず，一般にジャドワル（jadwal）と呼ばれている。これは，ポンプ近くのもっとも広いところで1～1.5メートルほど，

末端のところで10センチぐらいの幅がある[22]。畑の1区画はホード（ḥūḍ）と呼ばれており，土盛りの畦（タグナト）によって他から区別されている。

次に，ホードへの給水の仕方を図を用いて説明しよう。ただし，これは私が実際に観察したネギ，ヘンナ，クローバーなどの畑の場合である。なお，この他の野菜専用の畑では，作付けされる野菜の種類によって畦および水路の作り方がこれとは異なる。また，カルー地における小麦，ソルガム，ソラ豆などの大規模耕作は，これまでの2回の調査において，水不足などのために耕作が遅れ，残念ながら給水のやり方を直接観察する機会に恵まれなかった。

図8において，a1～c3 はそれぞれホードであり，斜線の部分はジャドワル，すな



現在a1のホードに給水している状態
固定的な畦
現時点で閉じている給水口
給水後、現在給水口を閉じている土で築かれる止水堰

図8　畑への給水

22）中部スーダンなどでは，水路をその幅の長さによって，「アブー・イシュリーン」や「アブー・シッタ」と呼び，マフムーダブの隣りの H 村の農業試験所でもその用語を使っている。しかし，マフムーダブの住民は，そういう言葉を知ってはいても，実際に自分たちの給水路を呼ぶ言葉としては用いない。

わち両脇に盛り土がなされた水路である。いま水が矢印の方向に流れているとする。この9つのホードに給水しないときは，sの位置に簡単な堤を築き，水がこの内部に入ってこないようにしておく。給水しようとしたときには，sの堤をくわなどで壊し，その部分にあった土をrの位置に持ってきて新たな堤を築く。すると，これまでこれらのホードと無関係に流れていた水がこれら9つのボードにつながる水路に流れるようになる。最初，主水路からもっとも遠いa1に給水しようとすると，b，c給水用の水路の給水口であるp1, p2のところを土で塞いでおく。水はx1のところの開口部分——アバガ（abaga）と呼ばれる——から a1に流れ込む。そのホードが充分給水されたならば，次には，x2の部分の土盛りを壊し，そこにあった土をy2の場所に持ってきて堤を築く。これによって水は a1 には流入せず，a2 のホードに入ることになる。同様に，x3を開口しy3に堤を築くことによって，ホードa3への給水が始まる。

a1～a3すべての給水が終了すると，次はp1部分を開け，q1に堤を築く。これで，水はaの3つのホードには流れず，bに流れることになったわけである。aの場合と同じやり方で，b1～b3への給水が終わると，p2を開いてq2で水を止め，c1～c3への給水を行なう。これらの作業がすべて終了したならば，rの止水堰を壊し，その土をsの位置にもってくる。そして右側の給水未完了の畑への給水を始めるのである。これが各ホードへの給水方法の原則である。なお，ここでは主水路から遠いホード（a）から始め，近いホード（c）で終わる順序の例を示したが，その逆の順（近いホードから遠いホードへ）で給水する例を観察したこともある。したがって，特に確認し

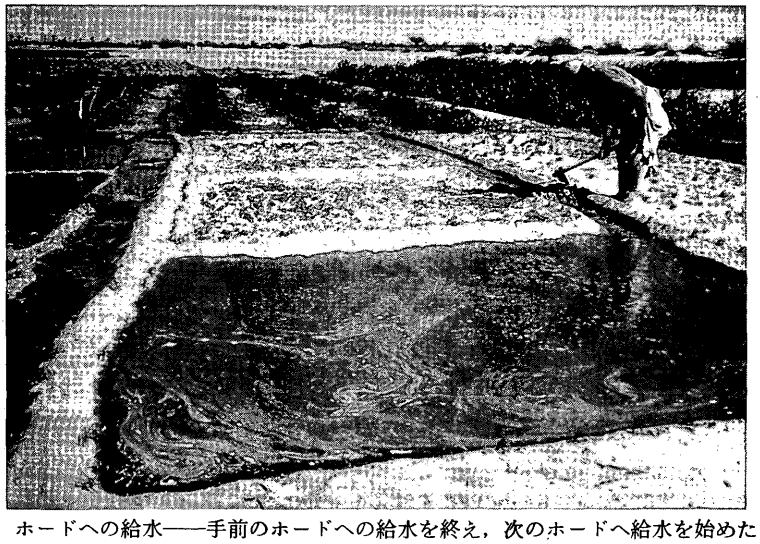


写真3　ホードへの給水——手前のホードへの給水を終え，次のホードへ給水を始めたところ

たわけではないが，おそらくどちらの順序が正しいということではないのであろう（写真3参照）。

5. 農作物

(a) 作物の種類

マフムーダブで作られている農作物には，(1) 人間の主な食料である何種類かの種なしパン[23] の原料となる小麦（qamḥ），ソルガム（dura または zura），トウモロコシ（zura shāmī, dura shāmī または ʿīsh rīf）など，(2) 家畜の飼料になる丈の短いソルガム（ʿīsh balad），クローバー（barsīm），豆類，など，(3) 商品作物で大きな現金収入源となるヘンナ（ḥinnā），(4) 自家消費用ならびに市場用の野菜・果物，などがある。市場用の野菜として特に重要なのは，大量に栽培されるソラ豆（fūl miṣrī），ネギ（baṣal）などである。

これらのなかで，パンの原料となる穀物類が，マフムーダブの最重要農作物となっていると思われるかもしれない。確かに，村の大規模農耕を代表するHA計画のカルー地では，毎年の冬作として小麦，ソルガム，さらに市場作物であるソラ豆が耕作されることが多い。しかしながら，村人の語るところでは，彼らはパンの原料を必ずしもすべて自給しているわけではない。正確な割合は分からないが，かなりの分量の穀物を，彼らはダマル市の市場で購入してくるのである。それは，この村の農地の生産性が低いためだけではない。そもそも，彼らには，穀物を自給しなければならないという考えがないのである。彼らは，経験から，小規模農耕のマフムーダブで生産される穀物類のコストが割高になることを知っている。そして，スーダン東部のガダーレフ地域などの天水に依存する夏季のソルガム耕作地での生産性が高く，それらを市場で買ったほうが安価で経済的であると考えている。もちろん，自家消費用や市場用に穀物を生産しているものもいるが，多くの村人はむしろ別な商品作物を作り，それを売却して手に入れた現金で穀物を買うことを，まったく当然のことと考えているのである。その意味において，マフムーダブは自給自足的な農村というよりも，貨幣を用いる商品経済の世界に完全に漬かった村落であるといえるのである。

彼らが市場用に生産する商品作物のなかでも，もっとも重要なものがヘンナとネギ

23) マフムーダブなど北スーダンの人々の食べている「種なしパン」には，イーシュ・ラギーフ（ʿīsh raghīf，単にイーシュと呼ばれることが多い），キスラ（kisla），ゴッラーサ（qurrāṣa）などがある。イーシュは村や町のパン製造所（ṭābūna）から購入してくるもので，小麦製の丸パンである。キスラはソルガム，ゴッラーサは小麦をそれぞれ原料としており，ともに自家製である。形状からいえば，キスラは直径70〜80センチの「クレープ」，ゴッラーサは30〜40センチの「お好み焼き」とでもいおうか。

である。それらを個別的に見ていこう。

(b) ヘンナ

ヘンナは多年生の灌木であり，その葉は人体を装飾するための染料となり，中東社会で広く使われている。結婚式などの祝い事の際に，手・足や指を染めたり，そこにアラベスク模様を描いたりする際に用いられる。また，熱冷ましや皮膚を固くするために用いることもある [cf. 片倉　1984]。ヘンナによって赤黒く染色された身体部位は，長ければ数か月その色が消えない。

ヘンナは挿し木（juḍūl）によって作付けする。一か所に3～4本の小枝を挿し木して，15～20日に1回の割り合いで給水する。成育を良くするために，雑草除去も行なう。5か月ほどすると30～40センチほどの高さになるので，それを地上から5～10センチくらいのところから刈り取る。それが第一回目のヘンナの収穫となる。それ以降，同じ要領で給水し，木の高さが1.5～2メートルほどになったところで，また刈り取る。このやり方を繰り返せば，年に2～4回ヘンナを収穫することができる。

刈り取ったヘンナの枝は，その場で日光にあて4～5日ほど乾燥させる。それから，棒で叩き，枝と葉とを分離する。この作業は，村人よりも遊牧民が賃労働として行なうことが多い。枝から分かれた葉の部分を集め，袋詰めして市場に運ぶ。枝の部分は家庭に運ばれ燃料となる。

ここで，ヘンナがどれほどの現金収入をもたらすかを具体例で考えてみたい。

KhAが語るところでは，彼の父がジャジーラ地にもつ2つの畑（それぞれ約3,700m² と 1,850m²）では，1986年の12月にヘンナの収穫をした。遊牧民を雇い，刈り取り・葉落し・袋詰めの作業（それぞれ ḥashsh, duqq, ᶜubūwa と呼ぶ）をさせた。その結果，26袋と20袋のヘンナの葉を得ることができ，市場に出荷した。当時，ヘンナの市場価格は1袋（shwwāl）[24] 当たり85ポンドであったので，計算上 KhA の父は，85×(26+20)＝3,960ポンドの現金を得たことになる。

当時，遊牧民の労賃は1袋当たり8ポンド，そして袋代は1袋3ポンドであった。そこで，(8+3) × (26+20) ＝506ポンドが収穫時の出費となる。

また，KhA の父の畑は HA ポンプ計画の一部であり，そこから水を提供してもらっている。次章で詳述するが，この場合水の提供者（現在の HA 計画の総責任者 AH）は，収穫物の市場での販売価格（ここでは3,960ポンド）から必要出費（同じく506ポ

24) ヘンナ1袋あたりを重量の単位で1ゴンタール（qunṭār）と呼ぶ。約45キロ・グラムである。

ンド）を差し引いた金額の半分を手に入れる権利がある。すなわち，給水者としてのAH と畑の所有者＝耕作者としての KhA の父は，収穫から得た現金を折半するのである。その結果，彼らはそれぞれ，(3,960−506) ÷2＝1727ポンドの収入があったと考えられる。

なお，ヘンナは年に2～4回収穫が可能といわれている。そこで，このヘンナ畑から年3回収穫が可能であると想定すると，KhA の父は年間5,181ポンドの収入をここから得ることになる。すなわち，平均すると，1か月432ポンドほどの現金収入になる。

この数字は，KhA などから得た情報をもとに筆者が計算したものであり，ここで考慮されていない出費などもあった可能性があるので，実際の収入はこれより少ないとも考えられる。しかし，ヘンナ耕作からの現金収入に関する一応の目安とみることはできよう。なお，KhA の家族は，この畑の他にも，ジャジーラ地およびジャリフ地に数カ所の畑をもっており，HA 計画内のカルー地での借地耕作権ももっている。

(c) ネギ

ネギもマフムーダブでもっともよく栽培されている商品作物のひとつである。年中収穫可能なヘンナとは異なり，ネギは冬作である。最初苗床に播種し，40～60日ほどで高さが20～30センチぐらいになったら，移植（shatl）の準備をする。この作業は，村の子供を雇って行なわせることが多い。まず，苗床からネギの苗（masmas）を根



写真4　ネギの苗の移植

を傷付けないように抜き取り，数十本集めて1束にする。すべての苗を抜き取るのに数日かかることもあるので，最初に抜き取られた苗は数十束まとめられ，根の部分が乾燥しないように土をかぶせられて，畑のかたわらに保存される。そのようなネギの苗の山を，kūm al-masmas と呼ぶ。なお，保存の際に，移植後の成長を良くするために，ネギの先端部を数センチ切り捨てる（写真4）。

移植する場合，苗どうしの間隔は10～15センチほどあける。当日給水し，その4日後にまた給水（これを musḥa と呼ぶ）する。それ以降は1週間ごとに水を与え，4か月ほどで収穫できる。

ネギの市場価格は，1986年当時，1袋（おおよそ100×60センチの大きさ）当たり60ポンドほどであった。なお，移植のために雇った子供たちの手間賃は，同じく86年において，1ホード当たり0.5～0.75ポンドであるといわれていた。

Ⅳ．灌漑農耕をめぐる社会的諸関係

1．農作業にかかわる人々の関係

前章では，マフムーダブにおける灌漑農業のあり方の概要を述べた。その知見にもとづき，本章では，実際の農作業を実施する際に，人々が作り出す社会関係のいくつかの側面を紹介したい。そのなかでももっとも重要と思えるのは，これまでにも示唆してきたように，この村では農業生産に関与する貴重な資源を誰が提供するかによって，農業収穫物が分配される取り決めがみられることである。まずこの取り決めを少し詳しく論じたい。

さらに，農作業をめぐって村人同士の間でさまざまな協力と対立関係も見られる。その例として，ここでは，ポンプ設置をめぐる問題，協同作業と前借り関係，さらに公的組織としての農業組合にふれる。

HA ポンプ計画の実現にあたり，村外とのネットワーク，つまりオンドルマーンのマフディー事務所との関係が決定的に重要であったことについてはすでにふれた。実際の農作業においても，マフムーダブの村人以外の労働力に頼る部分がきわめて大きい。その点について，西スーダンからの出稼ぎ民および季節的移動生活をしている遊牧民，この両者がマフムーダブの農作業において果たす重要な働きを指摘しておきたい。

2. 収穫物分配の取り決め

(a) 水と土地と労働力

マフムーダブにおいては，農業生産物もしくはそれを市場で売却した後の現金収入の配分をめぐって，きわめて興味深い取り決めの慣行を見出すことができる。それは，この村の農耕に欠かせない3つの要素，すなわち，水，土地，労働力を誰が提供するかに応じて，定められるものなのである。

この取り決めは，ひとつの耕作地においてこれら3要素が2人以上の人々によって提供されている場合に成立することになる。したがって，同一人物が給水者であり，土地所有者であり，かつ実際の耕作者であるような場合には，このような取り決めは見られない。たとえば，人為的な給水の必要がなく，土地の所有者が耕作者でもあるジャリフ地では，その給水者＝土地所有者＝耕作者が，自分の責任と判断のもとで実施した農作業の収穫物すべてを自分の物として所有し，自分の意思によっていかようにも処分することができる。同じことが，賃雇い労働力に頼る最初の井戸掘削を除いて，土地の登録者，給水者，耕作者が同一人物，もしくは同一家族内でまかなえるカルー地やハラー地のマトラ耕地にもあてはまる。さらに，ジャジーラ地であっても，自分でポンプを購入し，自分が所有し耕作している畑にだけ給水している農民にとっては，直接関係する取り決めではない。しかしながら，これら3要素の提供者が異なることの多いジャジーラ地の大半，さらには HA ポンプ計画に組み込まれたカルー地などにおいては，このような収穫の配分がきわめて重要な問題になってくる。

このような取り決めは，HA ポンプ計画が1951年に実現し，それからしばらくの間はその計画に参加した人々の間だけで保持されてきたと思われる[25]。しかし，先にも指摘しておいたように，近年，自己資金でポンプを購入し，直接ナイルから灌漑を行なおうとする村人が登場し始めた。そして彼らは，HA ポンプ計画から離脱して，それまで結んでいた収穫物分配の取り決めを解消するようになった。

さらにまた，この新設ポンプ所有者の畑に隣接した畑の所有者の一部が，HA のポンプよりもこの新しいポンプを通して給水してもらうことを選択する場合も生じてきた。その結果，彼らは新しい給水者との間に新たな取り決めを結ぶことになった。その新しい取り決めは，HA のそれとほぼ同じ場合もあれば，少々異なる場合もみられる。このような状況の変化を念頭におきながら，まず，HA 計画の取り決めから紹介

25) ポンプ導入以前のサーキヤ時代における収穫物分配の取り決めに関しては，情報を入手できなかった。

していきたい。

(b) HA 計画のポンプの場合

ジャジーラ地を私有し，そこを自分で耕作しており，給水だけを HA のポンプから受けている者は，原則として農業収益を給水者である HA と折半する。その場合，肥料，農薬，収穫用の袋などの代金といった「必要出費」に相当する分を，収穫総量からあらかじめ差し引き，残った収穫物が分配の対象となる。その際，収穫された作物そのものを折半することも可能なら，それらを市場に出荷してそこで得た現金収益を分けあう場合もある。

HA 計画の総責任者 AH によれば，細分化されたジャジーラ地の所有者は，今日では延べ2,000人ほどにのぼるという。そのなかには，近年の産油国への出稼ぎや国内での移動などによって，一時的に村を離れ自分の土地を耕作できない者も少なくはない。一説では，数十人の村民が湾岸産油国に出稼ぎ労働者となって出かけているといわれている。

このように一時的に村を離れているジャジーラ地所有者は，親族・隣人などに自分の畑の耕作権を離村している期間だけ貸与する。貸与された者――ここでは「用益権所有者」と呼ぶ――は，その期間中はその土地の農耕に関して一切の責任をもつ。したがって，彼と給水者との間で，収穫物分配の取り決めが結ばれることになる。ただし，この場合には，耕作に必要な出費を差し引いた残りの収穫物の 8 分の 1 を，村から一時的に離れている元来の「土地所有者」に与えることになっている。この「一時的不在地主」の取り分をカリジュ（karij）と呼ぶ。そして，カリジュを差し引いた残りを，耕作者と給水者との間で折半するのである。したがって，この場合，必要出費分を差し引いた収穫物のうち，給水者（すなわち AH）がその16分の 7 を取り，不在の土地所有者が 8 分の 1，そして実際の耕作者が16分の 7 を取るという計算になる。なお当然のことながら，カリジュは収穫物を市場で売って手に入れた現金によって支払われる。

次にカルー地である。先にふれたように，ここは現在では HA の息子 AH の名前でスーダン政府から10年契約で借りている土地である。しかし，契約の更新は容易であり，実質的には AH の私有地にも近い状態になっている。

140フェッダーン弱ほどの HA 計画内カルー地は，72 の小区画に分けられている。そして，計画の総責任者 AH によって，それぞれの区画の用益権は農民個人個人に与えられている。しかし，個々の耕作者が責任をもって自分の畑を耕作するジャジー

ラ地とは異なり，カルー地の作付計画はすべて AH が決定し，用益権を所有している耕作者たちはそれに従いながら農作業を実施する。ジャジーラ地のように細分化されてはいないカルー地では，計画的な大規模耕作が可能であり，最初の耕起もトラクターを導入して全体的に行なわれる。このトラクターの賃貸料を初めとする農薬，肥料などの必要出費を差し引いた残りを，土地の登録者であり給水者でもある計画の総責任者すなわちAHと，用益権所有者であり実際の耕作者でもある村人との間で折半する取り決めになっている。

1989年の時点で，カルー地の用益権を得ている農民は，小区画の数と同様に延べ72名である。そのうち，単独で6区画の用益権を得ているものが1名，4区画が4名，3区画が4名，2区画が6名いる。したがって，実質的には41名の農民がこの農地内での耕作に参与していることになる。その大半が上マフムーダブの住民であり，下マフムーダブの住民は1名（ただし，彼は4区画の用益権をもっている），北隣りの H 村の住民が1名加わっているだけである。

以上，HA 計画のポンプにおける収穫物分配の取り決めを見てきた。このようなやり方は，HA 以外のジャジーラ地への給水者と，それに依存する耕作者との間でもみることができる。すなわち，一部のポンプ所有者は，自分のポンプを使って給水している耕作者との間で，HA と同様の収穫物を折半する取り決めを結んでいる。

(c) SA 所有のポンプの場合

これらとは異なった取り決めもマフムーダブにはみられる。それは図5の 6a の農地に近年ポンプを設置した SA が，彼から給水を受けている農民たちとの間で結んでいるものである。

SA のポンプに関する取り決めにおいては，現金収入源としてきわめて有利なネギとその他の作物との間で取り分に相違がある。ネギの場合には，総収穫量の4分の1を給水者である SA が取り，残りを土地所有者＝耕作者が得る。一方，ネギ以外の野菜や飼料などの場合，SA の取り分は3分の1に増え，土地所有者＝耕作者が残り3分の2を取る。SA 自身の説明によれば，この相違は，市場価格が高いネギの場合，収穫の4分の1を得るだけで，給水者はポンプを作動させる経費をカバーし，その上利益を得ることができるからである。なお，ネギの場合に限り，給水者 SA は，自分の取り分のネギの収穫時の出費，すなわち臨時に雇う農業労働者への手間賃および収穫用の袋代を自分で負担しなければならない。ちなみに，89年の時点で，手間賃は1袋あたり10ポンド，袋代は5ポンドであった。その他の作物に関しては，これら収穫

時の出費は耕作者の負担である。また，肥料，農薬など，収穫以前の農作業を進める上で必要な出費は，作物の種類にかかわらず，すべて耕作者の負担とされる。

SA のポンプにおいても，土地所有者と耕作者とが異なる場合も生じうる。その際は，全収穫量の 8 分の 1（カリジュ）が土地所有者のものとなり，給水者はネギの場合には 4 分の 1，その他の作物の場合には 3 分の 1 を取る。そして，残りが耕作者の取り分となる。したがって，計算上では耕作者は，ネギの場合は全収穫量の 8 分の 5，その他の場合は24分の13を取るということになる。

これは SA 自身から得た情報である。なお，村居住者のなかで唯一の大卒者であり，比較的広い視野から客観的な話しのできる彼によるならば，HA ポンプ計画を除いて，マフムーダブおよび南隣りの J 村では，このような取り決めが一般的であるという。しかし，先にも記したように，マフムーダブにおいても，取り分を給水者と耕作者との間で折半するHA 方式を行なっているポンプ所有者もいる。さらに，ナイルの対岸にある耕地で，HA と同様の取り決めをしているところもあるという話も聞いた。この点を確かめるためには，近隣村落からさらに情報を入手する必要がある。

ここで紹介した収穫物の分配をめぐる取り決めに関しては，Ⅲ－3－dのところに掲載した図 6 にまとめてあるので，参照していただきたい。図に従いながら改めて整理するならば，ジャリフ地，ハラー地，一部のカルー地では，ここでいう収穫物分配の取り決めはみられず，耕作者は全収穫物（図 6 では数字の 1 で表わす）を得る。一方，給水者と耕作者が異なりうるジャジーラ地およびカルー地では，収穫物分配の取り決めがみられる。カルー地の場合，給水者兼土地（国有地）の登録者である AH と，耕作者であり用益権所有者でもある人物との間で収穫は折半（2 分の 1 ずつ）される。

それにたいし，ジャジーラ地では，HA の場合と SA の場合とで少々異なった取り決めが，耕作者との間で結ばれている。HA の場合，収穫は折半されるが，耕作者と土地所有者が異なった人物の場合にはカリジュ（土地所有者の取り分，8 分の 1）が必要とされる。SA に関しては，作物がネギかそれ以外かで区別される。なお，SA の場合，図 6 ではカリジュが取られる場合のみを記したが，もちろん土地所有者＝耕作者の時には，カリジュ分も耕作者のものとなり，彼はネギの場合は収穫物の 4 分の 3，それ以外の作物の場合には 3 分の 2 を自分の取り分とすることができる。

3. ポンプ設置をめぐる協力と対立

以上，資金力のある人物がポンプを設置し，自分の畑のみならずそれに隣接する農地にも農業用水を提供し，そこで収穫物を分配する取り決めを結ぶ例を紹介してきた。

しかし，すでにふれたように，近年では自分（たち）の畑に給水するために，自分（たち）で小型ポンプを設置する場合もみられるようになってきた。ここでは，資金力の必要なポンプの設置とその運営をめぐって生じてきた，いくつかの相互協力もしくは対立関係の具体例を紹介したい。

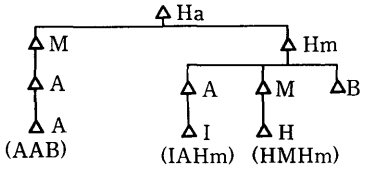
1986年において，HA所有のポンプが設置されている場所から下流に向かって200メートルほどのナイル川の岸辺に沿って，マフムーダブの村人が所有する3つのポンプが，それぞれ数十メートルの間隔をおいて設置されていた。上流から，IArの所有する物（仮にポンプ①としておく），AwHとArSとが共同で所有する物（同じく②），およびMSが所有する物（同じく③）であった。

これらのうち，②に関して共同所有者のひとり，ArS の語るところでは，彼はAwH と資金を折半してポンプを設置した。両者はそれぞれ，ジャジーラ地に4フェッダーンの私有の畑をもっており，お互いの農作業の必要に応じて調整しながら，②のポンプで給水をしている。ディーゼル・オイル代はその時ポンプを使用して畑に給水している者がもつ。その他の維持費，すなわちポンプ修理や延長用のパイプ，機械油代などは両者で折半している。もちろん，両者間に収穫物分配の取り決めなどはなく，お互いがそれぞれのやり方で耕作し，自分自身の収穫物をすべて手に入れている。

一方，MS 所有のポンプ（③）には，89年に訪れたときに変化が起きていた。これは元来，ジャジーラ地に10フェッダーンの土地を所有しているMSが自己資金で設置したものである。そして，MS の畑周辺にそれぞれ1～3フェッダーンの土地を所有している何人かの村人が，そこから給水してもらっていた。しかし，あるインフォーマントによれば，私の第1回目の調査の後に，MSから給水を受けていたHMHmとBAGとの間で争いが起きた（争いの理由について，インフォーマントは，知らないといって語ろうとはしなかった）。その結果，HMHmが自分と同じ「親族」集団（Bdアブと呼ばれている）に属すAABおよびIAHmと共に新たなポンプ（⑤）を設置した。それにたいして，BAGも，「それなら俺は10本ポンプを設置してやる」といって独立し，自分のポンプ（④）を⑤と③との間に備え付けたのだという。

89年時点で，BAGは自分の4フェッダーンの畑を，自分のポンプで給水していた。それにたいし，Bdアブの3人はひとつのポンプを使い，調整してそれぞれの畑に給水していた。なお，後者の場合，ポンプ新設に要した資金は，3フェッダーンの農地をもっている AAB が2分の1を，2フェッダーンの HMHm と1フェッダーンのIAHm がそれぞれ4分の1ずつ出したという。なお，彼らの系譜関係は図9に示しておいた[26]。

この Bd アブの例から分かるように，近しい親族関係にある者同士がポンプを共有し，調整してそれぞれの畑に給水することも稀ではない。そのような協力関係は，彼らが近しい親族的なつながりをもっているから，自然に生まれてくるものであると考えることも可能であろう。しかし，いわゆる「分節リネージ論」がタテマエとして説くのとは裏腹に，近しい親族同士が「常に」協力しあうとは限らない[27]。むしろ，近しい親族関係にある人人は，数世代上に共通の先祖をもち，その人物の所有していた土地を分割して相続してきたため，結果的に隣接した畑を所有することとなり，したがって共同のポンプから給水するのが便利であるという「実践上の」理由も考慮すべきであろう。



＊本文に関連した人物のみ記載。
アルファベットは名前を表わす。
一文字はその本人の個人名、カッコ内は、父名や祖父（祖先）名を付した名前。

図9　Bd アブの系譜関係

4.　共同作業と前借り関係

農業をめぐる社会関係として，共同作業と前借り関係にもふれておきたい。

マフムーダブでは，村民間の無償の共同作業は，ナフィール（nafīr）と呼ばれている。私が観察することのできた事例は，HA ポンプ計画にかかわるものであった。すでに記したように，ジャジーラの高台に設置してある HA 計画のポンプ小屋は，そこからジャリフ地に作られた水路（danab）にまでパイプを下ろし，それを通してナイルの水を汲み上げることになっている。しかし問題は，毎年ナイルの増水期にジャリフ地が水没することである。つまり，減水期に入って再び HA 計画のポンプを

26）系譜から分かるように，HMHm と IAHm とは父方のイトコ同士である。つまり，彼らは Hm という祖父を共有し，それぞれの父 M と A とは兄弟同士である。イスラーム法では息子同士は父の財産を均等相続するはずなのに，一方が 2 フェッダーン他方が 1 フェッダーンと所有地面積に違いがあるのはなぜか，と私が尋ねたところ，あるインフォーマントは，次のように説明した。Hm には M と A のほかに B という息子がいたが，B は子供をもたずに死亡した。B は亡くなるまえに遺言を残し，自分の土地は兄弟の M に与えると記した。その当時，M は村にいたが，その兄弟 A はオンドルマーン市で働いており，村を離れていたためである。その結果，M の息子の HMHm と A の息子の IAHm との間に所有地の開きができたのだという。

27）D. アイケルマンは，E. ピーターズによりながら，分節リネージ・モデルの弱点を 4 つ列挙している。そのひとつとして，彼は「集団同士が連合しあうときでも，それは分節リネージ理論の適用から予期されるような組み合わせで実現されるのではない」ことを指摘している。ちなみに後の 3 つは，分節的集団において経済資源が不均等に分配されていることの無視，政治的資源も不均等に分配されていることの無視，および，女性を通した親族関係の無視，である [アイケルマン　1988: 120–121]。

動かすためには，土砂で埋まったダナブ水路を新たに掘削しなければならない。この掘り起こし作業用にナフィールが招集され，村人が動員されるのである。

1986年における水路掘りのナフィールは，10月19日から数日にわたって行なわれた。私が直接観察できたのは，初日である19日の午前中であった。20人程が集まり，上半身裸になり，手をスコップ代わりにして土砂をすくって掘り下げる。そうかと思うと，ダナブ水路のなかに枯れ枝を束ねたものを置き，それをショベル代わりにして，土砂を川のほうに押し出そうとする。そのやり方は，まず枯れ枝の束の上に2人の村人が重し代わりに乗る。その束には2本のロープがつけられており，水路の両岸に並んだ数人の村人がその端をもっている。彼らは掛け声とともに一斉にロープを引き，ナイルの方に進む。それに引っ張られ，2人の体重のかかった枯れ枝の束もナイルの方に向かい，土砂をすくいながら押し出すというものである（写真5）。いずれにせよ能率はきわめて悪く，実際ダナブ水路が利用できるようになるまで，数日間この作業が続けられたという。しかし，この作業は，先にふれた収穫物分配の取り決めや，後にふれる賃雇いベースの農業労働者との関係とは異なり，金銭がまったく介入してこない，村人の「無償の」共同作業であるところが，意識的に強調されている。もっとも，HA計画の総責任者であり，ポンプの所有者でもあるAHは，ナフィールに参加してくれた者たちのため，羊を屠り，昼食を用意することになっていた。

89年の場合には少々事情が異なった。四十数年ぶりという前年の大増水とはうってかわり，この年のナイルの水量はなかなか増えなかった。ダナブ掘り起こし作業も後



写真5　ナフィールによるダナブ水路の堀りおこし

へ後へと延期され，ついに11月に入ってしまった。AH は最終的に，対岸のゼイダブ村の大規模農場にあるクレーンを借りてきてダナブ掘りをしようと決心したが，同年6月のクーデター以来，政情が不安定でゼネ・ストの噂も流れ，なかなか実行にまで至らなかった。そこで，AH は11月29日の朝に村の有力者を自分の屋敷地に呼び集め，翌30日の午前にナフィールを開始し，ダナブ水路の堀り起しをする旨を告げた。

しかしながら，86年の場合よりも1か月半も遅れているため，いかにスーダンとはいえ気温は下がり風は冷たく，身体が水につかる作業はきわめてつらいものであった。その上，前日に上マフムーダブに住む老婆が亡くなり，多くの村人がそちらの葬儀に出ていたため，昼ごろになってもナフィールに来たのは5～6人であった。彼らはおざなりにダナブ水路の堀り起し作業を行なったが，そうそうに引きあげた。12月1日はイスラームの休日である金曜日であり，2日は土曜日でダマル市で週市が開かれる日にあたり，マフムーダブの住民の多くは町に出かけた。そこで，3日の日曜日の朝に再度招集をかけたが，やはり人は集まらず，結局この年のナフィールは中止になった。最終的には，12月末に，ゼイダブの大規模農場からクレーンを借り，ダナブ水路の掘り起こし作業をする次第となった。

ナフィールと同じく金銭が介入しない関係として，前貸しの慣行もある。私の観察できた例は，AH の家に村内の「親族」集団，Sr アブの若者たちが来て，小麦の種籾を3袋借りていったことである。これは両者間の信頼関係にもとづく前貸し（sulfa）であり，Sr アブからは収穫後，同量の種籾が AH のところに返却されるという。この場合，AH は種籾を金銭で売却したのではなく，また返してもらう際にも「利子分」を取らない。まったくの善意にもとづく無償の貸借関係とされている。

5. 農業組合

マフムーダブには，農民組合（ittiḥād al-muzāriʿīn）がある。この組織は，ナイル県の農民組合の一支部として1979年に設立された。86年において組合員数は486名，年会費は65シリング（100シリングが1ポンド）であった。

主な活動は，灌漑用ポンプのディーゼル・オイル，肥料，農薬などの共同購入と組合価格での販売，北隣りの H 村にある農業試験所から実験用の種子をわけてもらいそれを村民に配給すること，農繁期前に農薬や虫害などの農作業に関する基本的な知識を農民に普及するため講演会や映画会を開催すること，などである。しかし，86年に一部の村人がもらすところでは，肥料の市場価格は1袋40ポンドであり，組合価格は38ポンドとたいした差はなく，そこで手続きが面倒な組合を通す購入よりも，市場

で買うことが多いとのことであった。

組合の役員は12名で，組合長は HA ポンプ計画の総責任者 AH，書記長は ShB である。4年ごとに役員の一部または全員の選挙が定められているが，86年時点まで，役員の入れ替えはなかったという。

6. 村外からの農業労働者

マフムーダブの農作業は，農地を私有したり，借地耕作権をもっている村人や周辺村落の住民のみによって行なわれているのではない。これまでにもたびたびふれてきたように，農作業の重要ないくつかの側面において，賃金支払いをベースにした遠来の農業労働者が重要な役割を果たしているのである。今日のマフムーダブで働いている村外からの農業労働者には，大きく分けて2つのグループがある。ターマと呼ばれる人々と，アラブ系およびベジャ系の遊牧民である。

ターマ（tāma）とは，スーダン西部から農繁期にだけ出稼ぎに来る人々である[28]。ダール・フール地域出身者が多いが，私が出会ったなかにはスーダン中央部のジャジーラ地方から来た者たちもいた。彼らは，特定の村と恒常的な関係を結び，定期的に出稼ぎに来るというより，北スーダン地域を広範に歩き，仕事を見つけた村でそれを終えるまで滞在する。

一方，遊牧民（ruḥḥāl）には，アラビア語を話すアラブ人とクシ語系のベジャ語を話すベジャ人とがいる。それらはまた，部族単位で下位区分化されており，マフムーダブ周辺では，前者としてはアバーンダ（ʿAbānda），マナーシーン（Manāsīn）など，後者としてはハデンドワ（Hadendowa），ビシャーリーン（Bishārīn）などが知られている。彼らは，一般に雨季直前の4～5月ごろにハラー（沙漠）に家畜と一緒に出かけ[29]，10月ごろにナイル沿岸に戻ってきて，村の周辺にキャンプをはる。それはちょうど村では冬季の農業活動が始まる時期とも重なり，その意味で労働力の需要と供給とが一致するのである。なお，このような遊牧民の農業労働者化は，特に80年

28）かつて，現在のダール・フール県の一部に，ダール・ターマーすなわち「ターマー人のくに」と呼ばれる地方があり，今日でも「ターマー」というナイル・サハラ語族東スーダン語系に属する言語を話すエスニック・グループがある [Tully 1988: 16]。西スーダンからの出稼ぎ労働者を指す「ターマ」という語彙は，この「ターマー人」と関係があるのかもしれない。

29）その際に，村人との間で個人ベースでラアイ（raʿi）と呼ばれる，家畜飼育委託の口頭契約を結ぶこともある。それを結んだ遊牧民は，村人の所有する家畜を預かり雨季の草原で飼育し，妊娠した状態で返すのである。その手数料として，86年では，村人は最初に牛を渡すときと返却してもらうときにそれぞれ5ポンドを渡し，預かってもらっている間1か月ごとに5ポンドを渡す慣習になっていた。羊の場合はそれぞれ1ポンドであった。

代から深刻さを増したいわゆる沙漠化現象によって，それまで以上に進んだと村人は語っている。

ターマにせよ遊牧民にせよ，これらの人々はさまざまな場面で，賃金労働者としてマフムーダブで働いている。すでにⅢ－3－dで，マタラ耕地に新たな井戸を掘るときに彼らを雇う例についてはふれた。また，ヘンナ収穫の際の彼らの仕事についても，Ⅲ－5－bで紹介した。

なお，ヘンナ収穫時の手間賃に関して，86年には1袋あたり8ポンドであったが，89年においては，鎌を使った場合は25～35ポンド，ヘンナが成長して手斧を使わなければならない場合には，40ポンドほどに上昇したといわれた。残念ながら，89年におけるヘンナの市場価格は聞き落したが，86年には手間賃が市場価格の10分の1弱であったことは，すでに記したとおりである。また，遠隔地から単身で出稼ぎに来ているターマ労働者に関しては，ヘンナ収穫の際に，1袋あたり25ポンドの手間賃を払い，その他に仕事を始める段階で労働の期間や人数にかかわらず30ポンドほどを食事代として渡すやり方，もしくは金銭のかわりに食事を現物で提供するやり方もあるという。このような食事代もしくは食事そのものをアワーイド（ʿawāid）と呼ぶ。

ナツメヤシの葉柄の刈り取り作業も彼らの仕事となることが多い。ナツメヤシの葉柄（jarīd）は，家屋の屋根用建材などに利用され，市場での販売も可能なものである。86年に遊牧民を雇って，自分の父親の所有しているナツメヤシ木の葉柄落とし作業をさせていたKhAの話によれば，彼らの仕事は，10メートル以上の高さになるナツメヤシの幹に登り，最高部のものを除いてそれよりも下の葉柄を切り落とし，それを100本ずつに束ね数日間日光にあて乾燥させるというものである。彼らはこれらの作業を4日間で行ない，合計2,350本の葉柄をえた。KhAの父親との契約で，雇われた遊牧民は，賃金のかわりに切り取った葉柄の半分を手間賃として入手した。しかし，彼らは，自分たちの取り分を雇い主であるKhAの父に売り，現金を手にしたという。ちなみに，当時のナツメヤシの葉柄100本の市場価格は，20ポンドであった。したがって，遊牧民たちは，およそ235ポンドの現金収入があったことになる。

なお，村民のなかにも賃労働に従事している人々がいるとのことであった。しかし，残念ながら，彼らに関する具体的な情報を得られなかった。だが，一般に，村外からの労働者と比較すれば，村人の労賃は割がよく，外来労働者のおよそ1.5～2倍であるといわれていた。

V．総括と今後の課題

小稿では，北スーダンの一村落での調査にもとづき，ナイル川および掘り抜き井戸に依存する灌漑農耕と土地利用のあり方，それと密接に関連した村民の社会的諸関係のいくつかの側面を具体的に紹介した。その過程で，商品作物を売却して得た現金収入や農業労働者の賃金など，農業経済の面で興味深いいくつかの数字にもふれた。その結果，特に明らかになったのは次のような点である。

まず，灌漑方式の相違にもとづく土地利用のいくつかの形態が，この村に見られることである。農地に関しても，ナイルに近いほうから，灌漑に頼らないジャリフ地，かつては水車，今日ではポンプによってナイルから給水するジャジーラ地，ポンプ導入により農地になったカルー地と続いている。これらは，図6で示したように，給水方式と所有形態の相違の独自の組み合わせにもとづいて区分されているものである。また，近年では，内陸の沙漠地帯，ハラー地も掘り抜き井戸によって一部農地に転じることが可能になった。

これらの諸形態が成立する条件として，今世紀中葉（スーダン全国レベルでは今世紀前半）におけるディーゼル・ポンプの導入が決定的に重要である。この新技術によって，従来の畜力に頼る灌水装置（サーキヤ）では耕地にすることができなかった土地の利用が可能になり，農地面積もいっきょに2倍近くに増加し，村の農業生産力は飛躍的に増大したのである。さらに農地の拡大は，近年のハラー地の利用開始によっていっそう進展した。これも，ディーゼル・ポンプなしには，とうてい不可能なことである。

そのような新技術による灌漑可能地域の拡大は，その導入がかなりの資金を必要とするため，この村の農作業をめぐる社会関係に新たな一面を付け加えた。それ以前にも，農作業を実行する場合に不可欠な水・土地・労働力の3つの「資源」の提供のあり方にもとづく農業収穫物分配の取り決めがあったかもしれない。しかし，ポンプの導入は，マフムーダブに，経済的・社会的資力をもつ給水者と，それをもたない耕作者との間に特異な関係を築きあげた。すなわち，小稿でいう「収穫物分配の取り決め」である。このことは，特にHA計画によって耕地となったカルー地で顕著であるが，多くのジャジーラ地の耕地でも見出すことができる。ここから，この村における「階級分化」の問題も考えることができるかもしれない。

また，この村の農業活動が，村落内部で自足していないことも指摘すべきであろう。

HA 計画設立時の資金源をはじめ，この村の主要産物がヘンナやネギといった商品作物であること，外部からの労働力に依存している部分が少なくないことなどが，この点で重要な意味をもつ。さらに，ここでは論じることができなかったが，湾岸諸国をはじめとする産油国への出稼ぎと，その結果としてのスーダンではとうてい得られない規模の資金の導入が，ポンプ設置やトラクターの購入資金に使われる場合にも注意する必要があるだろう。

また，86年と89年とを比べると，労賃などが格段値上がりしていることが分かる。井戸掘りの労賃が6.6倍，ヘンナの収穫の労賃が3～5倍，トラクターの賃貸料が2倍になっていた。これは，本文でふれたような遊牧民の労働力不足という要因もあるだろうが，基本的にはスーダン国内のインフレの激しさを物語っているものでもある。

なお，今後に残された課題も多い。たとえば小稿では，収穫物分配に関して，村人たち「語った」取り決めのあり方を紹介した。では，実際に分配する場合すなわち「行動」の側面でも，彼らが語ったとおりに，まったく問題なく分配されるのであろうか。個々の場合には，形式的な取り決めの「実態に合致した修正・変更」や意見の対立・争いなどがないのであろうか。これらは，いくつかの個別的事例を集めなければ，明確に判断できない問題である。同じことは，相続の問題を含めた土地所有のあり方，村外からの労働者との関係，農民組合の運営，などにも言うことができる。今後の課題のひとつとして，個別事例のいっそうの収集があげられる。

また，ここでは，ナイル灌漑農耕の例を紹介したわけではあるが，北部スーダンに住むアラブ系ムスリムが行なっている農業活動は，灌漑農耕に限定されてはいない。たとえば，北東部のカッサラ県などでは，雨季に依存する天水農耕や氾濫原農耕が大規模な形で実施されており，同地域はスーダン全体に渡る小麦やソルガムなどの主要穀物の重要な供給地になっている。短期的ではあるが，88年に私はカッサラ地区の天水農耕，およびガッシュ川の氾濫原農耕の予備的調査を実施することができた。その結果として，当然のことではあるが，土地利用の諸形態などがかなり異なることが判明した。また4月ごろから11月ごろにかけて集中的に農耕を行ない，その他の期間は別な仕事に従事する同地域の住民は，ナイル沿岸の村民とは相違した社会関係を保っていることも分かった。このように，北スーダンにおけるナイル灌漑地域と天水・氾濫原地域との農業活動ならびに社会構造の比較も，興味深い今後の課題である。

最後に，用語法の問題にふれておきたい。私はここで「農業収穫物の分配に関する取り決め」という用語を用いてきた。これは，農村社会学や社会経済史学などで「分益小作制　sharecropping」と呼ばれてきた制度と類似していると思われる。しかし，

ここでは意識的にこの術語の使用を避けてきた。それは次のような理由からである。

地理学の立場から西アジアの農村を調査・研究している大野盛雄氏は，イランの農村社会にみられる土地所有者としてのマーレキと，他人の土地を耕作して地代を納めるザーレ——これは定額地代を納めるエジャーレコナンデと分益地代を納めるライーヤットの二範疇に細分化される——との関係を，単純に地主—小作関係と置き換えることに慎重な姿勢をとっている [大野　1971: 43–68]。それは，ペルシャ語で表現されたこの2つの階級もしくは階層が，日本の農村にみられた地主・小作農とは，いくつかの点できわめて異なった存在だからである。たとえば，日本の小作といえば経営単位としての「家族」を指すことが多いが，ザーレは耕作権を与えられている「個人」のみを指す。また，日本の地主は「在村」であることが本来的と考えられているのに，マーレキは「都市」に住む「商人」が大半である。本質的に支配・従属関係にある日本の地主と小作とは，それでも一種の「共同体的」な保護・被保護の人間的つながりによってその関係が正当化されてきたが，それにたいして「マーレキとライーヤット相互が抱く不信感は，日本の地主，小作間にはとうていみられないものである」[大野　1971: 58] という。

大野氏と同様に，筆者自身もここで紹介したような北スーダンの農業をめぐる社会的関係を，無反省に「地主・小作」の用語で記述することにためらいを感じ，そのためこれまでに「分益小作」の用語の使用を避けてきたのである。もちろん，大野氏の紹介するイランの事例とは異なり，マフムーダブにおける「土地提供者」（ジャジーラ地の農地所有者や国有地の登録者）は，基本的には「在村」である。しかし，彼らならびにカルー地での耕作権所有者は，原則的に「家族」というより「個人」単位でその権利を有している点でイランに似ている。また，たとえば，HA 計画の総責任者である AH は，確かにマフムーダブ村全体の「保護者」のような立場にあり，彼と彼から水や耕作権を与えられている人々との関係が，イランのような強い「不信感」に彩られているとは思えない。だからといって，彼が村人すべてを「人格的」に支配しているというわけでもない。また，日本の「地主」制では，名称からも分かるよう

30)　土地，水，労働力の3要素が重要である北スーダンの事例とは異なり，イランではこれらの他に「種子」と「畜力」とが加わり，合計5つの要素の提供のあり方によって，収穫物の分配が決定されるという [大野　1971: 51–56]。

31)　さらに，北スーダンでは，イランのようにマーレキやザーレ，ライーヤットなどの，現地の言葉による「階級」もしくは「階層」概念の明確な表現はない。耕作者は一般に muzāriᶜīn（農業をする人）であり，土地やポンプの所有者は，文字どおり ṣāḥib al-arḍ（土地所有者）や ṣāḥib al-bābūr（ポンプ所有者）といったきわめて散文的で説明的な用語で語られるのみである。また，エジプトでよく使われる，「農民」を指すと同時にある種の「階層」概念でもある fallāḥīn の語はほとんど使われない。

に「土地」の所有権が最重要である。しかし，スーダンでは，農業用水を提供する人物いわば「水主」が，「地主」に勝るとも劣らずに重要である。この点も日本の農村の「小作関係」のイメージとは大きく異なるところである[30]。

以上の理由から，ここでは「収穫物の分配に関する取り決め」といった少々冗漫で説明的な用語を用いてきたのである[31]。それは，「小作制」という日本語が喚起するある種の既成イメージからはなるべく距離をとり，北スーダンの一村落の事例報告に徹しようという小稿の意図に沿ったものである。

だからといって，私は「分益小作」という用語でマフムーダブの「取り決め」を説明する可能性を否定しているわけではない。むしろ，通文化的な比較の場合には，この事例も「分益小作制」の一種として積極的に議論するべきであると考える。この意味で，ここで紹介した北スーダンの「分益小作」のあり方を，中東・西アジア，さらにはそれを越えた地域の事例と比較し，それらの異同を検討する作業も今後のきわめて重要な課題のひとつといえるのである。

文　献

AHMAD, H. A.
1975 The Zeidab Estate, 1903–1924. *ADAB: Journal of the Faculty of Arts.* 2–3: 83–97, Khartoum University.

アイケルマン, D. F.
1988 『中東――人類学的考察』大塚和夫訳，岩波書店。

DALY, M. W.
1986 *Empire on the Nile.* Cambridge U.P.

HASAN, Y. F.
1967 *The Arabs and the Sudan.* Edinburgh U.P.

HOLT, P. M.
1977(1970) *The Mahdist State in the Sudan, 1881–1898.* Oxford U.P.

HOLT, P. M. & M. W. DALY
1979 *The History of the Sudan* (*3rd ed.*). Weidenfeld & Nicolson.

堀内正樹
1984 「中東民族誌の展開」『社会人類学年報』10: 189–203。
1990 「家族へのアプローチ――中東研究の場から」『比較家族史研究』5: 65–76。

片倉もとこ
1984 「アラビアのマニキュア」『月刊みんぱく』8(1) : 15–17。

KEESING, R. M.
1975 *Kin groups and Social Structure.* Holt, Rinehart & Winston.

三浦徹
1990 「アラブ・イスラム都市における街区」佐藤次高（研究代表）『イスラム都市社会の形成と変容に関する比較研究』（科研報告書）東京大学文学部，pp.205–251。

大野盛雄

1971 『ペルシャの農村』東京大学出版会。

大塚和夫

1983 「ファッラーヒーン――ナイル川デルタ地帯の農業」『季刊民族学』25: 6–15。

1989 「ナイルの灌漑装置」『月刊みんぱく』13(9) : 12–13。

1991a 「北スーダンのカルチャー教室」『月刊みんぱく』15(3) : 15–17。

1991b 「月の満ち欠けと日の出入り，そしてクォーツの振動」掛谷誠編『生存の自然認識』福武書店（in press)。

QĀSIM, ᶜAun

1985 *Qāmūs al-lahja al-ᶜammīya fi al-sūdān*. al-maktab al-miṣrī al-hadīth.

TRIMINGHAM, J.S.

1949 *Islam in the Sudan*. Frank Cass.

TULLY, D.

1988 *Culture and Context in Sudan: the Process of Market Incorporation in Dar Masalit*. State University of New York Press.

WARBURG, G.

1978 *Islam, Nationalism and Communism in a Traditional Society: the Case of Sudan*. Frank Cass.